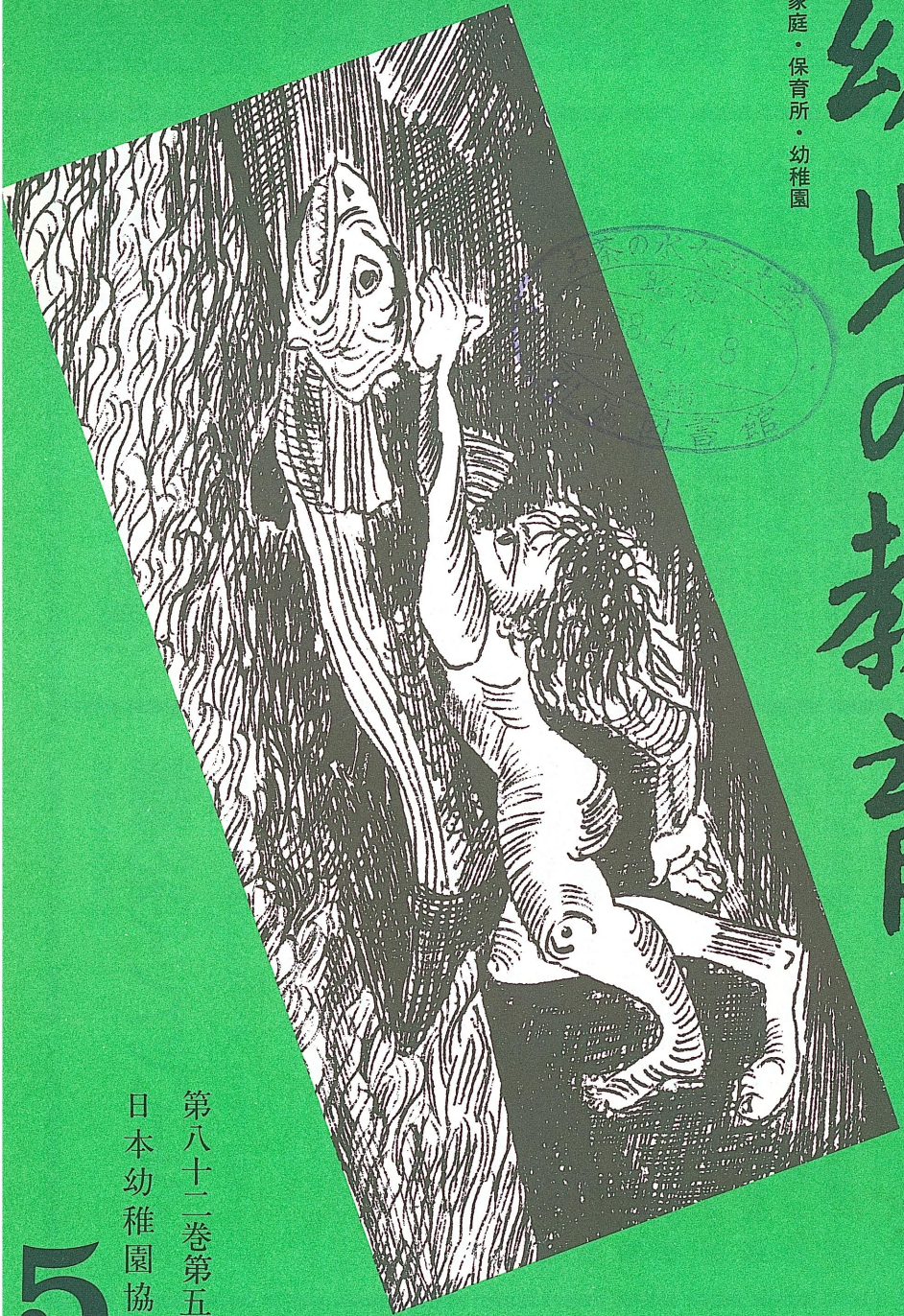


家庭・保育所・幼稚園

幼児の教玄月



第八十二卷第五号
日本幼稚園協会

5

好評発売中

保育の再点検(全5巻)

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもを社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きつと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。

- ① 望ましい生活習慣
- ② 望ましい集団づくり
- ③ 望ましい当番活動
- ④ 望ましい行事と生活
- ⑤ 望ましい言葉の指導

A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,750円

幼児をのばす

指導のポイントシリーズ(全10巻)

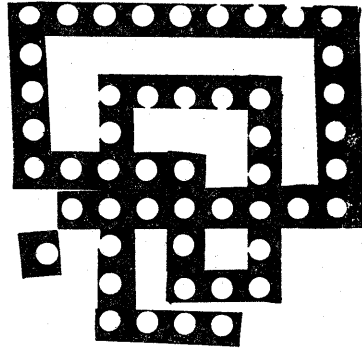
微妙で大切な保育のポイントを、がっちり読みとろう。

子どもたちに豊かな保育を心にかけておられる先生や、子どもがよくわからない、きつかけがつかめないと悩んでおられる先生へ、本シリーズは生きた指導の実例を提供します。保育の原点に立ちかえり、保育の考え方、子どもの見方、指導の方法などを点検して、子どもの心を読みとり新しい遊びへと展開してください。

- ① 保育の視点——ニニがポイント 海 卓子・著
- ② 指導計画——ニニがポイント 高杉自子・著
- ③ 絵画の指導——ニニがポイント 林 健造・著
- ④ 音楽の指導——ニニがポイント 早川史郎・著
- ⑤ 体育の指導——ニニがポイント 三宅邦夫・著
- ⑥ 自然の指導——ニニがポイント 小山孝子・著
- ⑦ こたばの指導——ニニがポイント 阿部明子・著
- ⑧ つっこ遊び——ニニがポイント 笠間典美・著
- ⑨ 園 行 事——ニニがポイント 仲田あつ子・著
- ⑩ 母親対応——ニニがポイント 本吉圓子・著

B6判・セットケース入り・平均208頁・セット定価9,600円

幼児の教育



第八十二卷 第五号

幼児の教育 目次

—第八十二卷 五月号—

© 1983

日本幼稚園協会

保育における間の模索と創造

河辺 泉……(4)

幼児期のあれこれ

関根 慶子……(6)

私の保育

—盲学校での混合保育—

猪平 真理……(14)

この頃の親の傾向

下田 弘子……(20)

花——思い出すままに

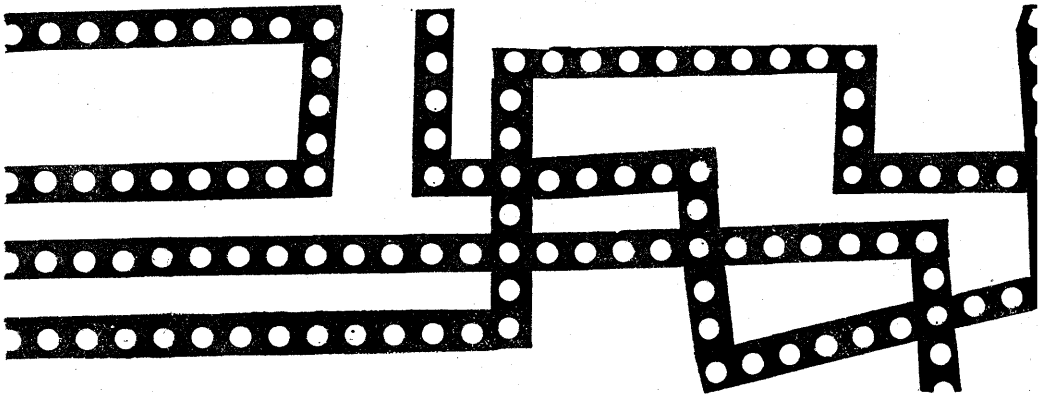
清水 光子……(22)

その折々に

早川 満寿子……(24)

花と子ども

飯沼 佳子……(26)



五月になると……………永井正子…(28)
子供の砂遊びの過程と心の動き

——五歳児K男の事例から——…小川清実…(30)
ニュージーランドの幼児教育(二)……………マイケル・クーパー…(37)

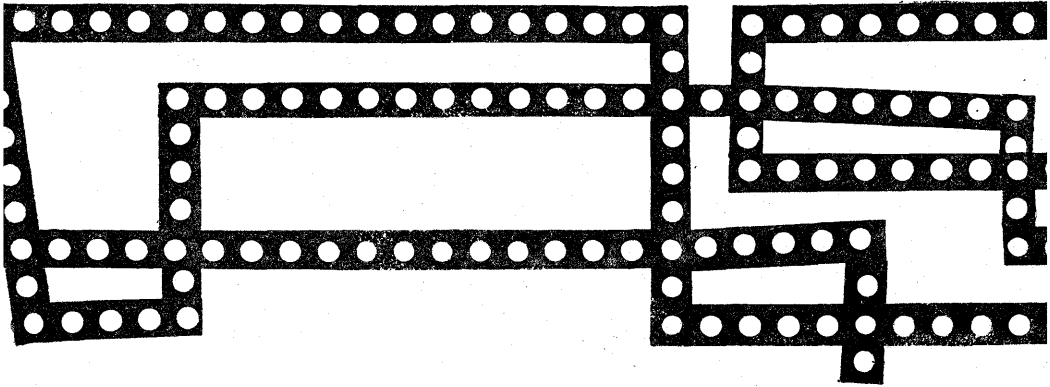
アメリカの若者の経験……………足立寿美…(46)
エリクソンと幼児教育(17)……………仁科弥生…(51)

史料紹介

『邦訳 日葡辞書』

——わが国中世の児童文化史研究によせて——……………(60)

表紙 紙・織茂 恭子
表紙題字・比田井和子
カット・福田 理恵



保育における間の模索と創造

河 邊 泉

五才になったばかりのK児と、電車のレールを繋いで遊んだ時のことである。ちょうどレールを繋ぎ終えた時に、遊びの終了時刻になって終ったのである。折角、部屋一杯にレールを繋いだのだから、きつと電車を走らせて遊びを続けたいだろう。だのに終了の時刻になったことをここで告げれば当然、反撥をすることが私には充分推察できた。

しかし、ここでは、現実の状況をまず彼に知らせ、わかってもらいたいと考え、終了の時刻になったことを伝えた。告げ終るか終らないうちに「いや」というが早い電車を走らせてレールの上に置き走らせていた。既に彼にも終了時刻と私の心が見えていたのではないかとさえ思われる程すばやい動きだった。

電車がひと廻りしたところで、もう一度、同じことを伝えた。「2回まわったら止めようね」と言った。待っていたとばかりに「2回、3回、4回、5回、……ずっと……」と激しい口調が返って来た。こうした場面に時々出会って経験していてもその時の彼の要求の意外な強さに瞬間ためらった。またこの時の電車が廻るのが、とても速く感じられた。同時に彼の表情に緊張感が少しずつ高まりつゝあるのも感じとれた。それから2〜3周、電車が廻るのを沈黙して見守った。電車がトンネルをくぐり抜けた時「もっともつと遊びたいけれど、駅のところに来たら止めようか」と言っていた。「止めようか。」のことが終るか終らないうちに彼は駅のところまで動いて、電車の来るのを待ちかまえた。そして差しの

べた手には電車が握られ、そっと棚にもどすとそのあと何時もよりもすばやくレールなどを片づけ終え、いかにも満足気な表情で「またあしたもする」と言って迎えの母親のところを駈けていった。

このことは保育の課程で幼児と保育者がかかわる時における様々な現象の中で体験することのひとつに似ている。特に「かたづけ」と呼ばれている活動に移る前によくみられる状況に似ているであろう。ひとつの活動から次の活動へ移行するような行動のけじめについて確実に学ばせなければと、例えば自発的な遊びの終了を音楽のレコードをかけて知らせ、一斉にすみやかにかたづけさせて、次の計画した活動にスムーズに移行させることを日課のように指導されている幼稚園や保育所を見かける。しかし先生達の考えられるようにはスムーズに運ばないし、子どもたちの身についていけないようである。

ひとりひとりの子どもをよく見てみると、前述のような子どもが多くいることに気づかれると思う。それは単に保育の対象としての子どもについてというよりも、子どもと保育者の関係について考えてみる必要がある。

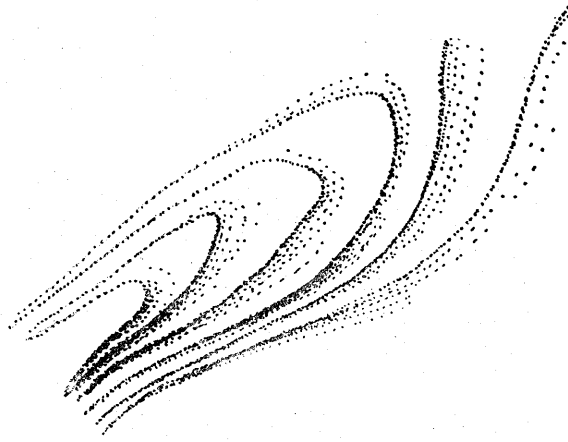
「ルールや約束をわからせ、これを守ることを学ばせたい」との目標をかかげて躾や生活訓練をとお実践されているが、現実を認識させるためにその現実の状況を知らせたり、わからせることはあっても、幼児自身の要求が強く保育者のもつ社会的要求と大きくズレるとき、幼児自身が自分の要求や目的を保育者の要求や目的と調和させたり、幼児自身が自分のものとしてとり込んでこれを統合させていくことは大へんむずかしいことである。しかし、このことは子どもたちが幼児期から少しずつ学んでいかなければならないことである。それはエリクソンの言う「子どもの側において、社会機構の中に統合されうるに十分な強さ……」すなわちこれを学ぶことのできる力を既にもっているからである。

ルールをわからせなければと考える前に私の体験にあったように「止めよう」から「止めよう」といつの間にか変化していったように、子どもに現実の状況を知らせると共に子どもの世界を共有しながら子どもと共に両者の要求の接点を具体的に模索し、発見創造していかねばならないと思う。これを保育における間の創造と言えないだろうか。このことは保育そのもののあり方だとも思う。

(洗足短期大学)

幼児期のあれこれ

関根 慶子



編集部のお求めに応じて、久しぶりに自分の幼児期を遙かに顧みると、第一に思い浮ぶのは、甚だ芳しからぬ次の一件なのである。それは春か秋か、寒くも暑くもない頃であつたらしい。ある日のこと、私はいつものように母のつくってくれたお弁当を持って幼稚園に行くため家を出たのであるが、とうとう幼稚園には行かず、近所の仲よしの子と道ばたで遊んでしまったのである。その子は「ふうちゃん」といって、私と同じ年頃の女の子で幼稚園には通っていないかつた。偶然「ふうちゃん」に出会つたのか、それとも私が幼稚園に行くのがいやになつて、「ふうちゃん」を誘い出して遊んだのか、そこはいま記憶にはつきりしない。子供のことでは隠す意志もなかつたとみえ、いつも通る通園通学路の、しかも家に随分近いあたりの道で堂々と楽しく遊んでいたのである。

私どもの家は本郷区森川町で、東大正門の前をまっすぐ西へ入り、小祠につき当るとその垣に沿つて後に廻つた奥にあつた。森川町に隣接する西片町の「誠之幼稚園」というのに、大正四年前後の頃通つていたのである。さ

らに少し歩を進めた所に「誠之小学校」があり、両者とも今も同じ場所にあるが、幼稚園の方は「文京区立第一幼稚園」と名称を改めている。その幼稚園まで幼児の足では二十分程かかったろうが、遊びほうけていた路上は家から五分とかかりそうもない地点で、西片町に入る手前のゆるやかな坂になっている所だった。「ふうちゃん」は素直ないい子で、幼稚園の友達よりも愉快に楽しく遊べたものらしい。二人で何をしたのか詳細はおぼえていないが、おそらく手毬をついたり、石けりをしたり、持物をそこで掂げたりしていたものらしい。その辺は当時の静かな住宅地で、人通りは多くないものの、普通に通行人はあったわけだが、そんな道端で子供が遊んでいても何ら不思議はないから、誰もとがめだてする人はなかった。

時の経つのも忘れて遊びに夢中になっているうちに、お腹が空いて来たのか昼食時になったかして、持っていたお弁当を食べ始めた。多分「ふうちゃん」と半分こにしたのだろう。ところが上述のように、そこは通学路に

あたっていたから、私より三つ年長の兄と二つ年長の姉が、相ついで小学校から帰って来て通りかかり、当然見つかってしまった（げ）。惚（げ）となつたのはいうまでもない。早速家に連れ戻されて、きつく叱られたに違いないが、あのことは全然おぼえていない。兄姉に見つかった時の、子供ながらも困惑した自分の顔、そこまでしか記憶は辿れないで、「ふうちゃん」と意気の合った遊びのあの楽しさだけが、今も私にとつてひそかに大切な思い出なのである。

こんな非行（？）に関係があるのかなのか、またある日、幼稚園の運動場で何か一人で練習していた私は、向うの渡り廊下に、ふと母の姿を見つけた。保護者会の日でもないのに母がやって来たのは、とにかく園児としての私の成績のすぐれないのを心配したからであつたらう。私は遊戯や手工など何れも下手で一向に上達しなかつたらしい。生来無器用で、運動神経にもぶく、社交性も乏しいというのが、幼児期からこの老年にいたるまで、私の性向とすべきものだろう。だから幼稚園でも

楽しい筈はなく、いわゆる落ちこぼれか劣等生というところであつたらう。そこで母は心配して、あの時姿を現したのであつたらしく、私も幼いながら母にすまないような恥しいような、もの悲しいほろ苦い気持をかみしめて見やっていたことを、ほのかに思い浮べるのである。

私には内気な所と大胆な所と両面が同居していて、気弱でありながら、幼稚園をさぼって道路で遊ぶような大胆な行動を敢てすることもあつて、この両面は今も明かに自分の中に共存するのを折にふれ確認せざるを得ない。

だから幼い一時期、ひどく多弁能弁の傾向もあつたという。それはむしろ自分では意識しなかったが、眼科医に通っていた頃、その医院で余りよくしゃべるので、そのお医者さんは、「このお嬢ちゃんは今に女弁士になりますよ」と言われたという。後年母は私によくその話を聞かせて、それなのに今のお前は、どうしてそう訥弁なのだろうと、成人してからの私の話下手を嘆いたものである。遠い昔のことで実におぼろげな記憶であるが、そう言われれば、硝子戸をがらりと開けると、にこにこ顔の

お医者さんがおられるので、図に乗ってしゃべると、みんなが笑った、というようにかすかな記憶がよみがえるようにも思えるのである。

なお幼児期のあれこれを思い出すままに漫然と書き連ねることしよう。

悲しく辛かった思い出は、冬になると段々と手の甲がお餅のようにふくれあがり、霜焼けのできることであつた。今の子供には余り見ることができないが、ひどくなると血が噴き出したり崩れたりするのである。それ程でない時も、日中ぼかぼかと暖かくなつて来たりすると、痛がゆくなつて来てまことに不快なものだつた。その霜焼けは足の指や踵にもできて悩まされるのであつた。それは幼児期の苦痛の一つであつた。もっとも、体質によつて霜焼けのできない子もあつて羨ましかったものである。ひびだけ切れる子、ひびと霜焼けの両方に悩まされて泣く子も少なくはなかつたのである。

が、木枯らしが吹いてお正月用の門松や笹の葉がさやさやと鳴る頃は、幼い心もときめいて楽しみが一ぱいあ

った。まず思い出されるのは、母のお伴をして正月用の買物に行ったこと。東大正門前の電車通りを、本郷三丁目の少し先まで行くのである。母の行くお店は大体きまっていた。電車通りに歩いて一番近い下駄屋にまっ先に入る。お正月用の下駄を女中さんのも含めて家族全員のを買い整えるのがわが家も習慣であつたらしい。鼻緒と台を別々に選んで、それぞれに鼻緒を据えて持えて貰うのである。下駄屋さんの器用な手つきを見ると、なかなか面白く、忽ちに格好いいきれいな下駄ができ上るのであるが、それらが全部できあがりぬうちに下駄屋さんを出て次のお店へ行く。十何足ぐらい注文した下駄は、あとで一括して家へ届けられるのであつた。それらを一箇所に積み上げて置いて暮のうちに履いてはいけないのであつた。今見る靴やサンダルなどと違って、正月を待つ新しい下駄には格別の味があつた。きれいな塗下駄や畳表の駒下駄、いきな鼻緒、いかつい大きな、木の香も新しいような男下駄、それらを時々ちらちらと見やりながら幼い心も浮立ってくるのであつた。

当時の日本には、クリスマスの行事など殆どなく、本当のクリスチャンの家庭でなければ何も関係ないのである。せいぜい絵本にサンタクロースなどが登場して、子供心をメルヘンの世界に誘うのであつたが、わが家も父が無宗教であつたから、無論クリスマスは知らなかつた。青年時代に我々は内村鑑三先生の門をくぐつてキリスト教に入信して今日にいたつたが、幼年時代は全く無宗教で仏壇や神棚に向つて手を合せた憶えも殆どないのである。

「もう幾つ寝るとお正月」のあの歌詞通り指折り教えてお正月を待つ。大晦日にはおせち料理の匂いが漂い、枕元に晴着を揃えると、子供にはもう用はないのである。それでも母達の忙しそうなのを気にしながら、床に入つたようである。当時は、元日から三ヶ日ぐらい昼間は門を開き、本玄関の戸も開け放しておいたものである。年始の客が黙って名刺を置いて行かれるように、六曲屏風などを立てた前に名刺受けの美しい塗盆を置いていた。そうした正月らしい気分も幼な心には快かつた。そして

子供達は面白がって時々その名刺受けをのぞきに行き、誰々さんがいらした、などと余計な報告をするのであった。お正月の幼少時の遊びは、室内では双六や坊主めくり・伊呂波がるた、勝負にお菓子や蜜柑を賭けたりもした。戸外では羽根つき凧上げである。それをするのにあのお正月の下駄を履くのが嬉しかったが、当時は道が悪かったから、泥がはねて新しい下駄が汚れるのがうらめしかった。三ヶ日が過ぎ、やがて七草がゆの日も終ると、もうあとは普通の日ばかりになってしまふのかと思つて、妙にうら悲しく名残惜しくてならないのであった。これらお正月の思い出は幼稚園から小学校にかけてのことであつたらう。

長姉は父の先妻の長女であつたから、後妻の末娘である私よりも二十余も年長であつたので、私の幼児の頃お嫁に行った。その婚家先へ泊りがけて遊びに行くのは、またとない楽しみだった。やさしいきれいな姉が色々ともてなし一緒に遊んでくれる。いいお姉さんだなあと思う。とかく時間をもて余しがちな子供にとつて、よその

家へ行って遊ぶだけでも変化があつて面白いのに、夜になるとわが家とは違う雰囲気の中で、違つた蒲団に包まれて寝るのが珍しく嬉しかった。そしてお別れには、リボンとかお手玉とか千代紙・折り紙といつたお土産まで貰つて、やさしい言葉に送られて帰ってくるのであつた。

戸外の遊びも忘れられない。春日遅々、綿入れのちゃんちゃんこなども脱ぎ軽やかなへこ帯姿となつて、兄達を先頭に立てて摘み草に行くこともあつた。そんな時は、子供としては遠出なのがまた嬉しい。その頃は、本郷あたりにも自然の花咲く野原があり、田園風景の残つている所があつた。そんな所でのんびりと半日を過して来る日もあつたのである。常時行つては遊んだ近い広場のことも、脳裏に鮮明に残つている。家の西側は少し進むと急坂となつて低地に下りるが、その向うの高台一円は「西片町十番地」で、福山藩の阿部邸があり、北方に折れて進む方向には誠之幼稚園・誠之小学校があつた。阿部邸の門前は広場になつていて、ほぼ中央には有名な「大椎樹」があつた。そこへ行くには、家の角を少し北

に進んで左に折れ、前述の「ふうちゃん」と遊んだゆるやかな坂を通過して行くのであった。子供の足でも十分ぐらいで行けたらうか。その広場は子供達に格好な運動場となった。我々もよく行って遊び、鬼ごっこや駆けっこにのびのびと駆けずり廻り、広いので何でもやれた。勿論それは幼稚園から小学校時代に続いていることである。中央の椎の木は、そのころ樹齢四百年ほどで樹高五丈ばかり、子供の目にもとてもみごとな大木で、そのどنگりを拾ったりもした。広場に面して大門を構えている阿部邸の庭内には稲荷があって、二月初午の日には、幟旗などを立てて町民に庭を開放したので、その広い立派な庭の築山や池のほとりを我々もとび廻って遊び、白い紙包のお菓子をおいでして喜んで嬉んだりもした。

子供はお祭りが好きなものである。というより、遅い時間の流れに退屈している子供は変化を好んだのであったかもしれない。むしろ宗教的な意識などなく、その行事に興味があったのである。わが家に近い、先にも触れた小祠は「映世神社」といって、前に御影石の大鳥居が立

っており、漱石の「三四郎」にも「森川町の神社の鳥居の前」などと出てくる所であるが、三州岡崎の城主本多氏が藩祖を祭ったもので、鳥居に向って右手に本多邸が静まり返っていた。今は神社も本多邸も跡形あとがたもないけれども。その神社の境内には四季折々の花々が咲き移り、ぐるりと一周できるような独立した一円をなしていたので、垣に沿って走り廻ったり、中を覗き込んだり、かくれんぼをして垣の際にうずくまったりした。幼い日に結ぶついて忘れ難い場所であったが、祭礼の日以外は門を閉じ、夜は真暗で、時には中で変事（心中・自殺など）が起ったという噂も流れたりして、一面何か暗い印象もあった所である。秋の祭礼の時は楽しかった。九月なので未だ暑い時もあったが、少しこぎれいな着物に着かえて、近々と聞える太鼓の音に促されるようにして、夕方からお神楽などを見に行くこともあった。神代の勇者の猛々しいしぐさや優雅なお姫様の姿に目をみはり、怖い鬼や悪者の姿に恐れたりもしたが、殊に面白かったのは、おかめ・ひよっとこの顔や所作などであった。

森川町の氏神は根津神社で、旧制一高の近隣のあたりにある。その祭礼の日は、色々な美しい見せ物が出たが、一方には目を覆いたい気の毒な身体障害者の姿をわざと見せ、地べたに坐って物乞いをする人々もあった。

幼な心にも、人生の明暗を肌で感じさせられるようなものがあった。だが広い境内や近くの道路には、臨時に設けた沢山の店が立ち並び、客を待って賑っていた。そうした中でも、大きくふくれあがった綿飴や、鉢などの道具を型どった飴などが特に幼児の目をひいたようである。一度だけでも口にしてみたいと思ったのに、不衛生だとか母は言って、小学校時代に入っても、ついに一回も手にすることはできなかった。弟などは、やっとラムネを買って貰ったようだったが、我々女の子は、うまくいっても酸漿はかせか大抵の場合は千代紙・おはじきといった変りばえもないものに終った。根津神社のお祭りは楽しいというより、疲れて足を引きずって帰って来た時の、何やらものうい印象が残っている。人ごみの嫌いなわが性は幼より老にいたるまで変らないのであろう。

幼児期に重い病気としてジフテリアにかかったことがある。相当長い期間、病院に入っていた。その病苦についてはおぼろげにしか思い出せないが、嬉しかったことは、看護婦さんに可愛がられたこと、また特に退院の時、人力車に乗って看護婦さんの膝の上で、両手に抱えきれないほど沢山のきれいな色彩にあふれたお土産を持ち帰った時のことである。それはおもに色々の折り紙で折った鶴亀や兎や馬や車やお家など、それから千代紙のお人形か紙風船などの紙製品であったように思い出される。病気の直った快感の上に、やさしい看護婦さんの膝に抱かれて飛ぶように走る人力車、それに目に楽しい美しい色の紙作品をお土産に急ぐ久しぶりの家路、それらが幼い心にこの上ない満足感を与えたものらしく、あの時のことは、兄弟の中でも自分だけの知り得た醍醐味でもあるかのごとく、大切に私の胸のうちにしまわれていて、何かの折にふと人知れず思い浮べるのである。

金魚屋や苗売りの節廻し豊かな声や、風鈴屋のリンリン・リリーンという涼しい音、それらは幼い時の風物詩

ともいうべく、それらの声が巷に響くと、子供らは道路にとび出して眺めた。思うようにそれを買って貰えないのだけれど、赤やまだらの美しい金魚、短冊型の色紙を下げたきれいな大小の風鈴、それらは見るだけでも面白く、今はなつかしい思い出である。

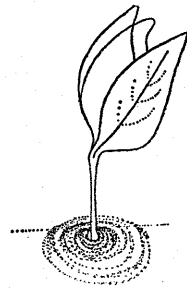
夜の闇は、幼児にとってやはり恐ろしいものであった。電灯はあっても今のように明るくないから、寝る前に暗い厠に行かねばならないのも苦になった。夜道から聞えて来る「あんまーはーり」(按摩・鍼)の太い声と、からころというその盲人の下駄の音、それらは幼い私にとって怖い夜の象徴ともいべきものだった。「あんまはり」の音が聞えて来ると、母はきまって「さあさあ寝ないと連れて行かれますよ」と寝しぶっている子を促すのであった。

思えば、我々の幼児期の思い出は、主として母と共にあった。父は学者で身体も弱く、外出以外は殆ど書齋に籠りきりであった。我々が長じてからは、きびしいがやさしい父で理解もある親として私には映り、尊敬もし

た。しかし、我々の幼時にはわが子を抱くことも殆どなかった由で、後年、兄の乳母だった人が訪問して来た時、孫を膝に乗せた父を見て驚いた程である。母は書齋の父に聞えないように、子供のやかましく泣く時は、遠い部屋に連れて行くなどの苦心もしたようである。だから幼児期の父との接触は余り記憶になく、ただ母について書齋に行くと、机に向っている和服姿の父があり、言葉ぐらいは交わしたこともあったらう。そんなわけだが、父の存在感は重かった。私の幼時には、父は存在するだけで十分意味があったのであり、青少年期となると、父との接触、父との思い出は、顕著に具体的なものとなるのである。終りに一言つけ加えておきたいのは、これらの私の幼児期は、悲喜両面があったのであり、楽しいこと喜ばしいことと、悲しいことやるせない思いは相半ばしていたと言えよう。人の世の明暗、わが家の明暗、自身の明暗をも、それとなく感じとっていたということであり、それは幼少時と雖も当然また必要なことであると考えるのである。

私の保育

——盲学校での混合保育——



猪平 真理

「せんせい、おはようございまーす」の元気な声が、廊下を駆け抜ける音と共に、次々と部屋にとび込んできます。まだ始まりの二十分も前です。ここは盲学校の幼稚部ですが、この朝の始まりを待ちかねて集まって来るのは、目の見える健常の三才児です。この子ども達は盲学校のすぐ近くに住んでいるので、住まいが遠くにある視覚障害児より、ずっと早く登校するのです。

このような朝の光景がみられるようになってから四

年、私達の試みてきた盲児との混合保育もやっと軌道に乗ってきました。近頃ではいわゆる統合教育、あるいは混合保育といわれる実践も各地で行われ、その成果も次々に発表されています。私共の保育もその一つですが、盲学校という障害児の学校の方がベースとなっている例として、ここに紹介させて頂こうと思います。

盲学校の幼稚部は、盲児の早期教育の必要性が叫び出されてから、全国的に充実されてきています。しかし、

この施策とは裏腹に、近年、そこへ通う盲幼児の数が減ってきてしまいました。特に東京都内では四校ある盲学校幼稚部のうち、二校までが現在休部状態です。本校でも四才児、五才児合わせて、それまでは八〜十人も在籍していましたが、五十三年度には三人、五十四年度には二人というように極端に減ってしまいました。

これは全国的に幼児の数が減り、又医学の進歩等も加えて、視覚障害児の全体数が一時よりも減少したこと、そして一般の障害児への理解が広がって、地域の幼稚園や保育園で受け入れてもらえるようになったこと、又もう一つは、市区町村の福祉政策が進んで障害児の通園施設が増えたこと等がその理由にあげられるように思われます。

視覚に障害があつて、しかも幼児の場合には言語だけの指示では伝達できず、手をとって指導しなければならぬことが大変多いものです。ですから、在籍児の数が減って教員の手が行き届くのは、一面良いことのように思われます。しかし満足な子どもの集団がないところで

は、幼児時代の健全な発達に何か欠けるものを残さないでしょうか。幼稚部を担当するものにとって、これは深刻な問題でした。

そこでまず、これを補う手段として交流保育を定期化するのを考えました。子どもの集団を外部に求める方法です。私達は以前から本校の近くにある幼稚園に協力をお願いして、何度かその大勢の園児達と遊ばせてもらってききました。それを五十三年度には、週のうち一日を一年間にわたり交流させてもらえるように定期化したのです。幸い協力をして下さる幼稚園があり、複数の担任が毎回子ども達を連れて通うことになりました。この時の在籍児は年長児ばかり三人で、目以外の障害もない子ども達でした。この時は日常的な保育活動の他に、いもほり遠足やゆうぎ会等の行事にも積極的に参加でき、盲児三人にとってこの幼稚園で交流する日は、緊張感のある楽しい日となりました。毎回、朝、私達が園の門まで来ると、大勢の園児達は歓声を上げて迎えてくれ、我先に手をつなごうと大変な騒ぎを起していました。こ

の交流保育は園の先生方と話し合いを重ねて行なわれたものでしたが、週一回ということもあって、盲児の本来の力を充分に發揮することができず、最後までお客さん的な存在でした。

次の年、五十四年度は在籍児が二名で、一人はことばを持たない重複障害児、他の一人も時々一人言をわずかにつぶやくだけで、何事にも意欲を持っていないような子どもでした。この二人だけの生活ですと、個別指導には徹底できませんが、子どもの声というものが全くない幼稚園です。それ故、これまでのように、外に出かける方法では、かえてこの子ども達に負担を負わせるような気がします。そこで次のような案を考えました。それは健常児の方にこの学校へ来てもらい、遊び仲間になつてもらおうというものです。本校のある文京区には国公私立の幼稚園も多く、保育園も充実していて、その園児の年齢である四、五才児も家庭にはいないと思われ、そこで三才児に焦点をあてることにしました。当初区役所の出張所あたりで三才児のいる家庭を探すか、近隣を尋ね歩く

かせねばならないと考えていましたが、偶然校庭に遊びに来た子どもに声をかけ、そのお母さんの口聞きで、たちまち予定していた五人の三才児が集まってしまいました。もちろん、公式に認められた在籍児ではなく、単なる遊び仲間ということだったので……。このような経緯の中で混合保育の形態ができていきました。三才児はその後五十五年度には八人、五十六年度には十人、今年度は十二人と次第に増やしてきています。

盲児はこの集団の中で私達の子想したより多くの良い刺激を受け、成長していつてくれました。この四年の間に次のような例があります。初年度のT子ちゃんは自発語を一つも持っていませんでしたが、「ハイ」という返事を獲得してくれました。友達がいるおかげで出席をとる時の返事がたくさん聞けたのです。もともと活発な子どもであったK君は、警戒心が強すぎたり、わがままな面があつて、最初はいまぐち友達と遊ばせませんでした。しかし二年間を混合保育の中で過ごすうちに、三才児の友達の家へ泊まりに行く程の仲良しができました。K君

には毎日、実に楽しそうに遊んでいました。次はK君の大好きな遊びの一つ、ウルトラマンごっこの採録です。

ねえ、みんな。

ウルトラマンごっこしようよ。

ぼく、ウルトラマンエイティだよ。

さところちゃんはももレンジャーになんな。

たかしくんは、カーくんとおなじ、

ウルトラマンエイティでもいいよ。

アンくん、たたかいだ。

シャー、トゥー、バシーン。

ウルトラマンはつよいんだぞ。

とっちゃん、しね。

ぼくはとっちゃんをやっつけたんだ。

アンくん、さところちゃん、たかしくん、

とっちゃんしないよ。

どうしようか。………まあいいや。

みんな、こんどは先生をやっつけようよ。

ねえ、みんな。

………

あーあ、いなくなっちゃった。

(K君は全盲のため、友達があつては八方へ散ってしまつて、

ついて行けません。こんなこともしばしば見られま

す。)

K君は年齢が3才児よりも上であつたこともあつて、

遊びの中ではリーダー格でした。友達とエネルギーをぶ

つけ合うように充分遊ぶ中で自信をつけ、当初見せてい

たビクビクした姿は全く見られなくなりました。

盲児の中には同じ年代の仲間を嫌つたり、恐怖の対象

とまで思う子どもがいます。このような傾向は、就園時

までの乳幼児期に同じ年代の子ども達と遊ぶ経験が少な

かつたり、目の手術等で入退院を繰り返して、限られた

大人とのみ過ごしてきた盲児に多く見られます。

H君は子ども達が遊ぶ声を、「うるさい、うるさい」と

言い、これを嫌つて保育室から出てしまひ、ドアの外に

立たずんだりしました。Y君は入学した一学期の間、友

達が一緒にいる場では決して歌わず、遊ばず、食事も摂

らないという子どもでした。しかしY君も次第になれ、「ふみちゃん」とか、「ターくん」とか、友達の名前をつぶやくようになり、次第に明るい表情になって少しずつ遊ぶようになりました。

障害児の早期教育という点、即、訓練を考える風潮があります。これももちろん大切なことですが、どんな子どもでもまず充分に楽しく遊んで欲しいと思います。それには、子ども達の遊びのある環境が用意されるにこしたことはありません。これは障害の重い子ども達にとっても必要な環境であろうと思います。

一方、この混合保育は健常児の三才児にとってはどんなものだったのでしょうか。初年度は五人の集団でしたが、一年間を終える三月にはこの五人の全員のお母さんから、後の二年間もこのままおいて欲しいと言われる程、喜んでもらうことができました。小人数の手の行き届いた保育が魅力だと言うのです。この近隣でも子ども達の数が少なくなつて、友達を作る機会がなく、家にもつた生活をしていたのが、本校での保育で友達を知る

ことができ、友達と遊ぶ場を与えてもらったことは、本当にありがたいことだと聞ききました。三才児の通い始めはまだ自分が遊ぶことのみがせいっぱいの平行あそびの時期ですが、二期の運動会や音楽会がある頃には集団行動もできるようになります。そして三月の送別学芸会では、小学部の人達に負けないような劇を演じてくれます。

また小さいうちから障害児の人達への思いやりを育ててもらうのは、何にも増して貴いことだと涙を流さんばかりに言つて下さる方もあり、かえつてこちらが恐縮する程です。三才児が初めて盲児に接する頃は、盲児の見えない目を見て不思議そうであったり、気味悪がったり、その気持のままを表わしています。しかし、こちらがそれにこだわることもなく、見えない人にも他の人にも同じ接し方をしてるのを見ているうちに、この人達も私達と同じ態度をとるようになるのです。一年を一緒に過ごすうちに、「ぼくのお弁当には〇〇が入っているよ」と盲児の手をそつと持つて触らせたり、「しんちゃ

んのせてあげよう」と足の不自由な盲児を二輪車にのせたり、ことばのない盲児には出席をとると、手をとって挙手させながら「ハイ」と代弁してくれたりします。

このような心優しいやりとりを見ていると、こちらもほのぼのと暖かい気分になります。

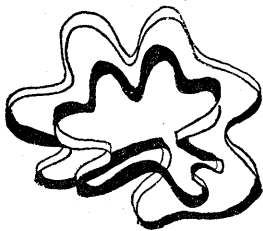
三才の希望者は二年目からロコミですが、二十名にもなりました。今のところ、健常児のみでも遊べる集団ができるようにと考えて、十人程度を限度とし、月齢の低い人や学校から少しでも遠い人には遠慮して頂いています。

今年度ももう卒園の時が迫ってきました。春から夏にかけて毎日のように、体を泥んこにして砂場であそび、最後はいつも真裸になって走りまわっていた三才児の人達ともお別れです。就学猶予をして、この幼稚園に三年間通ったI君も、四才児の終りにやっと歩けるようになって皆を喜ばせたS君も一年生になります。S君のお母さんはS君が生まれてから、健常児をもつお母さんとお話をすることがなかったけれど、この二年間でお母さん

ん同志のおつきあいができるようになって本當にうれしかった、これからS君を育てていく自信を強く持てるようになったと言っています。

この混合保育も、三才児が正式の在籍児でないこと、そして盲学校へ入学する盲児の障害がますます重度化する等の問題を抱えています。しかし、ここしばらくは、この形態を続けることができるのではないかと思っております。

(筑波大学附属盲学校)



この頃の親の傾向

下田 弘子

一、自分の考えを変えようとしぬい。

一、育児書の読みすぎ。

一、自分の子供さえよければよい。

一、自分が悪くても決してあやまらない。

私の園では登園が遅く、朝からアクビ・朝食ぬき・指しゃぶり・昼頃にならないと目がさめない。くわえて年長児でも乳児の様な甘え方をする。すべての親の生活のパターンで動かされている為である。

「昨日は二時頃ねたんです。親が徹夜しちやって」

「無理に起したら、いくら云っても朝たべないんですよ」

「あーら指だけじゃなく鼻も耳もいじるんですよ」

でも大きくなればなおるっていうから」

「ボケーとして一人で洋服着ないし、私も遅刻しちやうから着せちやうんです」

「いつも時間がないでしょ。昨日は時間があったから、こういう時じゃないと出来ないから、沢山スキップしたら、今朝はベタバタまわりついて、いやになっちやう」

母親のこうした会話の中に反省はなく、むしろ云う事をきかない子供達に責任のある様ないい方をする。時間的に不規則な職業が多く、やむをえない部分もあるが、その分子供にしわよせが来ている事に気がつかない。その辺覚悟の上で子供を生んだのだ

と思うのだが、"もう少し会話を多く、出来るだけ規則正しく"等園側で働きかけても、O大学のO先生はこう云っている、Oの本にはこう書いてあった。

だから自分には自分なりの育て方がある。保育園では保育園のいいようにやってくれ、という答が返ってくる。園側でも規格製品のな子供を育てる気は更々ないが、基本的な生活習慣を無視したい、分には、ほとほとあきれてしまう事がある。自分の考えでなく、権威に弱いのである。自由に雑草の様に育てるといのだが、その事が我まま・勝手・乱暴につながり、自分の感情をセーブ出来なくなる子に育つ事に気づいていない。自由という事が放任にはかからない。そして愛情をそそぐ事が、小動物を愛する様なやり方だと思っている。保育園での子供の生活や全体的になおしてほしい事を、ビデオにとって、保護者会で見せ、園側の意とする事を話し、ビデオの感想を求めた所、"自分の子供がうつっていな

かったのがっかりした"という思いの方が強かった。そのくせ知的な要求は強く、保育園に入れておくと、幼稚園に入っている子より劣るのではないか。もっと字や数をおしえてほしい等、云ってくる。長い目で子供を理解しようとせず、^{フラスコ}1+1=2という様な、はっきりした答えが返ってくれば出来の良い子だと思っている。幼児の時に遊びこみ、遊びの中からいろいろな事をまなぶ事によって、より良い人間形成が出来るのだと話しても、「でも幼児の時に、英語とか算数をおしえておくのが一番いいっていわれているじゃない」ときき入れ様としない。本末転倒ではないだろうか。

もちろん、すべての親がこうではないが、全体的に常識だと思っている事を全然知らず、理論で押しまくり理屈が多い。

目下我園としては、こうした親と、どこまで理解しあえるかが課題である。(港区立西麻布保育園)

花——思い出すままに

清水光子

かすかに水の流れる音がする。雪だけの水かしら、と思いつながら家の裏へ出てみました。あたりはまだ白一色ですが、子ども達が築山と呼んで小さなスキーのジャンプ台にしている高みの下あたりに小さな流れができてその音だったので。そして、その流れに沿って、何と、水仙の芽が、筆の穂のような蕾までつけて一面に出ているのです。驚き、否、感動でした。終戦間もない頃北海道旭川で迎えたはじめての春でした。「黒い土を夢に見るのよ」と言つて「大げさね」と笑われたものですが、半年の雪ごもりからようやく春のきざしを感じはじめた三月も末のあの時の感動は今も私の心に鮮やかによみがえってきます。水仙の蕾は日に日にふくらみ、家の北側などはまだ一メートル余の雪が積つて

いるのに芳香を放つて咲きはじめるのでした。

その頃、住んでいた師範学校の寮から、二十数人が巣立っていきました。北海道各地はもとより、内地のあちこちへ、若い教師として赴任する卒業生です。その卒業式に、その人達の胸を飾つてあげたい梅の花を、と姑が作りました。造花の道具は一切持つていた姑ですが、紙が手に入りにくいその頃、古い手紙の端や、古ぼけた半紙を使い、水彩絵の具でうす紅に染め、小枝は庭の木の枯枝を使いました。それまで私は造花がきれいでした。枯れないのがいやだなと思つていました。けれど、こうして姑に手伝つて作った小さな梅の花を胸につけ、晴ればれと、誇らしげに卒業式に出ていく若者達をみると、この造花にこめられた姑の心に胸をあつくしたのでした。

姑はいわゆるおひいさま育ちで、生花も深く身につけていた人ですが、路傍の花、野の花をその花にふさわしいさりげなさで生けて、身のまわりを清々しくする術のようなものを備えていました。特に菫

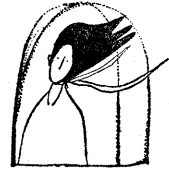
が好きで、雛祭に使ったはまぐりやさざえの殻に植えて机の上に置いて楽しんでいました。この董は東京の我家の日当りのよい窓の下に一面出ていたのですが、その室を払げるといので別の処へ移しました。その場所が董は気に入らなかつたのか、大へん少くなつてしまいました。それを知つたときの姑の悲しそうな顔、花にも心があつて、大事にされるとちゃんとそれに応えてくれるのよ、と語っているように思われました。はこべの花やはこぎさの花を、草むしりの時摘んで小さな壺に生けて仏壇に供えたりしましたが、それは幼い子ども達が「先生、あげる」となすなやかたばみの花を大事に包んで渡してくれるのと通じるように思われます。一本一本、花びらの一つ一つに丹精こめて菊づくりをしているおすしやさん。「うちの藤のやつ、やつと今年一房つけましてね」と眼を輝かして告げる眼鏡屋さん、「こうしてさア、一本一本、そつとピンセットで移植するんだよ」とストックをつくる房州の友達、花を通しての知りあいほどの人も生き生きと、

子どものような素直な心で、私を落ち込みから救い出してくれるのです。

この間孫達が集つたとき何かの話から、眼が見えないのと、耳が聞こえないのとどちらがつかいかと考えを言いあつていました。ちょうどそこにシクラメンの見事な鉢があつたのを小二の女の子が指して「あたしは眼がみえない方がつらいと思うわ、だつて、こんなきれいな花が見えないなんて！」。それをききながら、不自由な人達の心の花に、どうしたらなつてあげられるか、を思つたことでした。

あの、「モモ」(ミヒヤエル・エンデ作)が、マイスター・ホラに逢い、見せられた「時間の花」時間の源、星の振子の往復で一つ一つちがひ、どれもあでやかな色と香りを持ち、咲いては散っていく場面。そして「地球が太陽を一巡りする間、土の中で眠つて芽を出す日待っている種のように待つことだ」というマイスター・ホラの言葉がこの頃、私の心の中に逞しい草のように一杯拵がつてはなれないのです。花が咲くには時間がまだまだかかりそうです。

その折々に



早川 満寿子

この小さな幼稚園の庭には、有難いことに四季折々に何かの花が咲いている。始めは教材にと植えたもの、卒園の記念にと植えたもの、わずか一輪だった花が地面一杯に広がって咲いているもの等。そして今は、好きな花や樹が沢山増えてしまったところだ。二十年前の開園当初は、背丈程の柳とポプラ、ぎんべらくらいが、風にさやさやとなびく庭だった。小さい花壇には、三色すみれとベゴニアがやっと植えられていたが、それでも殺風景な庭には、この小さい花達が何と鮮かだったことか。今でも忘れられない。その年の七月頃だったか、J君の

おばあ様が夏に強い花をと、松葉ぼたんを持って来て下さり、園庭のフェンスに添って十メートル程も植えて下さったのだ。初めはかなりの間隔を置いて植えられたものが、次々と増えて原色に近いさまさまな色の松葉ぼたんが、夏中、いや秋の中頃まで咲き続け、その間に子供達と砂の様に細くて黒いつやつやした種を取り続けたものだ。当時はこの辺も、殆んど畠と荒地だったので、道行く人達も足を止めて眺めて行ってくれた。このおばあ様はそれ以後も、お孫さんが卒園される迄、庭の草を取って下さったり何気なく掃除をして下さったりした。今はもう他界されたが、夏に松葉ぼたんを見ると、おばあ様のことを思い出すのだ。

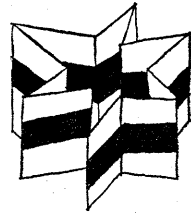
季節はまちまちだが庭の一角から花を教え上げると、紅梅、水蓮、沈丁花、こぶし、木蓮、ぼけ、あじさい、ばら、ヒヤシンス、クロッカス、チューリップ、朝顔、ある年にはスイトピー、そして、ゆり、ベゴニア、マリーゴールド、サルピヤ、ひまわり、あざみ、ポリアンサス、すみれ、ゆすら梅、は

なみずきの白と赤、椿、さざんか、すもも、ぐみ、黄桜、八重桜、さるすべり、カンナ、桃、ハイビスカスの赤と黄、よい香りのライラックなどがある。冬には庭の片隅に造られた温室の中で、早春の花が咲き競う。というより狭い温室は数種類のくじやくサボテンでうずまっている。もう一つ、丈も幅も大きくなり過ぎてこの温室に入れてあげられない程大鉢の、月下美人がある。七月中頃から九月頃まで、十五輪から二十輪の花を咲かせ、その姿と香りとを楽しませてくれる。寒い間も枯れない程度に、凍らない程度にして冬を耐えさせる。少しの日があれば窓辺に運び、夜の寒さにはガラスから少し離してやる。夏の夜に二十センチもの白い大輪が茎や葉をしならせて咲く姿は美事だ。夕涼みを兼ねて幾人もの園児や卒園生が、お父様やお母様と見に来て下さる。中学生になったある卒園生は、夏休みの宿題にと、咲き始めるところから数時間をカメラに納めて、観察記録を作ったりしてくれた。午後七時半頃から静かに、ふるえる様に咲けば、もう十時頃から

はどことなく、いのちの下り坂で外側の葉を後方にそらせながら、三、四時間の短い花の生命を終わっていくのだ。この月下美人も、葉を切り茎節をつめて葉ざしにして増やし、差し上げたりもしたので、もう何十鉢もが他の人々の手によって育てられている。この他にも、君子らん、ゴムの木、ハイビスカス、折り鶴らん、はかたからくさなども、株分けしたり、さし木をしたりで、花の子や孫が、いろいろな方達の家で数え切れない程咲き続けていくはずだ。今年は何輪咲きました。とか、新しい葉が出て来ました、など。又、園庭のあの花はもう咲きましたか。と卒園児やその御父兄の折々のお便りに書いて下さったりすると、もう、うれしくて仕方がない。

毎年同じ時期に咲いてくれる花々。花との語らいが何よりも楽しみであり、花のことばが解る様な気がするのだ。子供達も幼い心できっと、花との語らいをしているに違いない。やがて、春の花々が咲き競い、はなみずきの美しい季節が訪れる。

花と子ども



飯沼佳子

「花」をテーマに文を書く様にといいお便りを載せた時これならば書けそうだと気楽な気持ちでひきうけましたが、書き出してみますとあれもこれもと思いはせ何をどう書いたらよいか迷ってしまいます。

子どもの頃の花の思い出と言えば、春、見渡す限りの田をうめつくしたレンゲ草のうす赤紫の花です。その中にすわりこみ両手いっぱい花を摘んだことも今となれば話しの中だけのことになってしまいました。と言ってもただかか三十年位前のことですが、昔、なに気なかったこんな風景も、今では得

がたい事となってしまいました。私の住む信州の穂高は最近観光地として有名ですが、観光のため、極く一部の田んぼにレンゲ草が植えられたと言うことです。その昔は田を肥するためのレンゲ草だったのが今や見る為だけのものになってしまったかと思えますと根なし草の様なはかなさを感じます。

ここ信州は春の訪れが遅れます。四月も中頃にまず梅、続いて杏、間をおかず桜、桃、りんごと次々咲きそろう、字のごとく百花りょう乱の時です。四月の終りから五月の始めにかけ、野の花も一斉に咲き出します。

私の園のまわりは、まだ幸いなことに野原や小川が残っています。又、この頃では果樹園なども大規模にやらないと採算がとれず、あちこちで荒畑が目立ち始めました。そんな荒地は子ども達の格好な遊び場になります。畑が荒れ出しますと、これは土地によって違うでしょうが、この辺ではタンポポが待っていましたとばかりはびこり始めます。で、黄色のじゅうたんをしきつめた様なタンポポの群生があ

ちこちに出現し、目を見はる風景です。一昨年迄、秋口に甘い香りを漂よわせていた近くのブドウ畑も昨春はタンポポ畑にかわってしまいました。が、子ども達はタンポポ摘みをたんのうしました。

それから、フジツル、ニセアカシアが繁茂します。フジツルは花はうす紫で藤の花に似てきれいですが、その繁殖力は恐るべきものです。これが一旦はびこり始めますと、木、生垣、フェンスと所かまわず巻きつき、大木もこれにからまれ枯れる程です。数年前迄は園の雑木林の下草としてひっそりしていたフジツルも、まわりの木々がたおされ、畑が荒れ出すと同時に力をつけあたり一面に大きな葉をひろげて来ました。これが茂り出した一年目は幼稚園で飼っている山羊のえさに好都合と喜んで、冬用迄と思い園全体の子どもが出て葉を集めました、乾燥かしましたらちよっとさわっただけでバラバラとくずれてしまい使いものにならずじまいでした。そして次の年からは更に勢いを増し、大木にも巻きつき始めました。やぎもうさぎもこの葉を赤り好ま

ず、始めは好感をもっていたこの葉ですが、最近は恐怖さえ感じ、カマを持って木にからまったつるを切って歩いています。

ニセアカシアもこれに似たりよったりで強い生命力を持っていて気付くとアカシヤ林です。

それに較べますとすみれなどはその姿の通りひっそりしていて、群をなして咲くということはまあありません。他に、ほたるぶくろ、野のあやめ、つゆ草、ふでりんどう、へびいちご、その他様々の草花が折々にやさしく咲きます。花の好きな子がどのクラスにも必ずいます、屋外に花のある限りどの保育室も小さな野の花で飾られています。

園を訪れた方に、「ここではこういう野の花があつていいですね。」と言われ、今では得がたい環境であることに気付かされました。大輪に色鮮やかに咲く花も勿論美しく人の心をひきつけますが、道端に、土手に、ひっそり小さく咲いた花を愛する子ども心に見習い、又、そういう心が損われないう様大切にしたいと思えます。(長野県・松本青い鳥幼稚園)

五月になると……

永井正子

入園式の日は皆、緊張した面持でお母様にくっついていました。お友達と仲良くなって、早く幼稚園が好きになってほしいものと、ひとりひとり顔を見ながら、祈るような気持ちであったという間に一月が過ぎてしまいます。以前受け持った三歳児の子供たちはどんなだったかしらと、古い日誌をめくってみました。



四月生れのSちゃんは、とてもしっかりしています。入園式の次の日から、自分の好きな遊びをペックと見つけて、よく遊びます。泣いている子を見て、「なんであんなに泣くの？」と、不思議そうに聞きました。

五月生れのK君。無表情ながら、黙々と遊びま

す。入園式から六週間程たった頃、Sちゃんと二人で、「ひこうきだー！ ブーン ブーン……」と言いながらとびまわり、初めてニコニコ顔を見せてくれました。

Tくん。幼稚園にいくと、泣きっ放し。十時を過ぎた頃「もうがまんできない！」と言いながら、改めて泣き出すのです。一週間ばかり泣き続けたのですが、ある日、お母様が帰ってしまったあとしばらくして泣き止んで、それからお友達のをばまで行って遊び始めました。クレヨンで画用紙にグルグル巻きを描きながら「おかあさん、おむかえにきてくれるよね」と何度も念を押し、やっと安心した様子で遊んでいます。あとで、部屋の片隅でまだ泣いているM君を見て、「どうして泣いているの？」と質問し

ました。

一月生れのYちゃん。毎日張り切って幼稚園に来ていますと、お母様はとても喜んでいきます。確かに元氣よく遊んでいる様に見えるけれど、彼女の言葉はひどく大人びていて、変なのです。「えをかいていいですか」「おそとにいてもいいですか」「おてあらいにいてもいいですよ」……幼稚園に通い始めて五週目が過ぎる頃から、少しずつ言葉が変化してきて、お友達との会話を聞いていても違和感があまり感じられなくなってきました。よかった、やっと幼稚園に慣れてきてくれたのかしらと思っておりましたら、お母様からの報告がありました。「始めは張り切って出かけていましたのに、この頃出がけにくずるんです。」

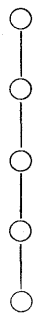
入園当初は

○ 自分の気持ちが出せないで、緊張したまま遊びだす

○ 不安がいっぱい泣いてしまう

○ ほとんど気にしないで、マイペースで遊び出す

など、いろいろな反応を示していた子供たち、幼稚園に通う日数が増えるにつれて、次第に新しい環境に慣れ、本来の自分の姿を取り戻してきたようでした。



さて、今年幼稚園に入ってくる三歳児の人たちは、どんなふうに幼稚園を受け止め、新しい環境に對してどんな反応をするのでしょうか。まず緊張をほぐし、自分の有りのままをぶつけて幼稚園（お友達・先生・お庭にいるうさぎさん・お友達のお母様たち・お部屋のおもちゃ・そのほか幼稚園に関係あるもの全部）と出合い、馴染んでほしいと願っています。

今までは、傍らでただ見ているのが精一杯でした。今度は小さいお友達に、私も何かお手伝いが出るかしら……どこまでお手伝いすべきか、また、どこでじつとがまんして見守るのがより良いのかしらと、悩み悩みで五月が過ぎていきます。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

子どもの砂遊びの過程と心の動き

——五歳児K男の事例から——

小川 清実

はじめに

子どもが砂とよく遊ぶことは、すでにほとんどの人々が知っている。そして子どもにとって砂と遊ぶことがたいせつであるということも、様々な文献に示されているように、衆知のことである。

たとえば、K・H・リードは『幼稚園 人間関係と学習の場』において、砂と子どもが関わることを次のように位置づけている。

『子どもたちは粘土やフィンガーペインティングのような『きたない』遊びを経験する必要がある。このような経験は、いつもきれいにしようとする努力することによ

り負わされる子どもの重荷を、少なくしてやる助けになる。こういうものは感覚的な経験を与えるので、子どもたちに深い満足をもたらす。(中略)

どろや砂や水も、子どもにとっては粘土と同じような価値があることを、ここで述べておく必要がある。私たちは粘土やフィンガーペインティングを、健全な子どもたちが真から喜んで指も使いながら遊べる、どろんこの穴や水たまりなどの高級な代用品だと考えていることさえある。(中略) 良い幼稚園ではこのような『土に親しむ』経験も与えるであろう。というのは、どろや砂や水なども、自己表現の手段であり、しかも大人の抑制がないかぎり誰にもできる、最も直接的で満足できる経験

だからである。」⁽¹⁾

リードは、子どもが砂やどろんごと関わることは、子どもに感覚的な経験を与え、子どもたちに深い満足をもたらすものであるととらえている。だれでもでき、最も直接的に満足を与えるのが、砂と関わる活動であるとしている。

たしかに、砂や地面とは、どんな子どもでもすぐに取り組めるものであろう。

問題をもった子どもやおとなを治療していく方法のひとつである箱庭療法(Sandspiel)においても、砂は重要なはたらきをしている。レオンハルト・シュレーゲルは、カルフ箱庭療法を次のように評価している。

「子供はおよそ二才から四才の半頃において、砂遊びにとりわけ熱中するものである。実はその際彼らにとって大切なのは、単にたやすく形を作り得る素材——つまり、湿り気を帯び、こねることができ、それがまた彼らに何ともいえない満足感を与えるようなもの——に没頭することの喜びなのである。(中略)

彫塑の素材とか砂とかを用いて遊ぶことは、ある年令においては(本来的な欲求) (Urteiliches Bedürfnis)

だということである。まず始めには単純な球や菓子のような小さな塊の、しかしその後山や谷やトンネルのある風景全体といった固有の形において感ずる喜びは、小さな手の中に形を作ることのできる湿った砂、あるいは手の指の間にさらさら流れる乾いた砂を肌で感ずることの喜びに変わっていく。⁽²⁾

砂や泥と関わるということが、子どもたちが容易に触れ、こねることができ満足する活動であるとするシュレーゲルの見解は、リードと同じ立場にたつとみてよいだろう。

たしかに砂や泥と関わったことで、子どもが満足を得たととらえられる事例は数多い。子どもがじっくりと砂や泥と関わったら、それはたいはいは子どもに満足を与えた活動とみなすべきであらう。私たちは子どもと共に砂や泥と関わっていく過程で、それが満足した活動であることを共感できる。砂の素材としての特徴によって、

子どもたちはいきいきと活動していくように見える。

しかし、その活動の展開があまりにもはやいので、たとえ子どもと共に活動している場合でさえ、私たちは子どもたちのひとつひとつの活動のすべてを理解するのは困難である。

私たちは、子どもたちが砂場や地面で、砂と関わっている姿をしばしば目にする。それがあまりにも日常的であるために、子どもがどのように砂と関わるのか、なぜそうするのかということについて考察されていないのが実状である。そこで私は、子どもと砂との関わりを細かく見、分析し、考察していくことによって、子どもが砂とどのように関わっているか、そうすることで、どのような満足感を得られたのかを明らかにすることができるのではないかと考えた。そして子どもたちが砂とどのように関わっているのかを事例から分析し、子どもの心の状態について考察を試みた。なお、この事例は、文京区にある音羽幼稚園の五歳年長組の子どもの記録である。

事例

五歳の男児三人が砂場の片隅でそれぞれ穴を掘っている。砂をかき出して外に出す。三人の男児は自分が掘っている穴を深くしようとして懸命に掘っている。別々だった三つの穴が地面の下でひとつになる努力が続けられていく。腕を穴の底まで伸ばして、つながるかどうかを探りながら作業がすすむ。すぐとなりで遊んでいる子どもたちが使っている水が穴に流れるのを防ぎながら穴を掘っていく。素手で地底のトンネルをていねいに掘っていく。

つながついたらしい。皆の顔が一斉にこっとする。つながつた部分を見ようと穴の中をのぞいている。Kがひとつの穴のそばにため池のようなものをつくる。その間にHとMとは水をくみに行く。Kがつくった池のところに水をあげる。そこから水が穴の中に流れこむ。水が流れたためにこわれそうな部分を直す。HとMは水を流すとすぐにまた水をくみにいく。

Kだけが穴のところにいると、となりで遊んでいた他の子どもグループの男児たちが、Kたちのつくった穴の上を歩いて、穴をこわしてしまふ。HとMはそれにはかまわずに穴の中に水を流し入れる。けれどもとうとう穴は完全にふさがれてしまふ。

KとHとMの三人はつと立って別の砂場へ行く。そこにはHiがつくった大きな水たまりがある。あわがたくさん浮いている。KたちはHiに「あわをとっていい？」と尋ねることがわられてしまう。それでそのそばにある小さな水たまりに浮かぶあわをKがしゃもじで集める。Mは水をくんできて、水をたしてあわをたくさん出す。Mもあわをバケツに集め出す。コップをつかって、あわだけをすくうように努力している。Kもバケツにあわを集める。たいへん注意深くあわをすくって行く。あわをすくいながら、「おべんとうが終わったらまたやろうな」と言う。バケツにいられて「あわができた」と言う。バケツに満々とあわが浮かぶのを見て「これでいいや」「いっぱいだ」「すげえ」と言う。あわを集めたバケツを砂場のふちに並べて置く。

考察 I

この事例は、この後、ほぼ一日にわたる活動である。

私はここでKに注目して考察していくことにする。Kは、一日のうちで、穴を掘って水を流す活動、あわを集める活動、そして水が全くつかわれずに白く乾いたさらさらの砂をさわり、その中に黒く湿った土をいれて見え

なくしてしまうという三つの異った活動を行った。これらのKの活動は、それぞれに意味があると考えられる。

そこで、これまでのKたちの活動をみてみよう。

Kら、三人の男児は地底のトンネル掘りをはじめた。砂場にやってきて穴を掘る。本来、「穴を掘る」とか、その穴の中に「水を流しこむ」活動は、満足のいく活動となりうるものである。Kたちもその予定だった。やっと通じた地底のトンネルに水が流される。彼らが地底のトンネルを完成するまでは、水は排除されていた。Kたち、三人の男児は、黙々と穴を掘り続けていたことから、すでに三人には共通の遊びのイメージがあったのだろう。できあがった地底のトンネルに水をたくさんいれようとしていたときに侵入者があらわれる。他の子どもたちによって、トンネルが踏みつぶされ、破壊されてしまったのである。観察者が驚いたことには、Kたちはトンネルを踏みつぶした子どもたちに、何ひとつ抗議せず、すっと別の砂場へ移動したのである。Kたちにとって、まさに地底のトンネルに水をたたえようとする、そ

の絶頂を破壊されてしまったのだから、破壊した相手を攻撃するのは当然と考えられる。しかし、Kたちは全く抵抗せずに、また特に肩を落とすことなく立ち去ったのである。Kたちにとって、破壊した男児グループは体も大きく、団結力もあり、抵抗できる相手ではなかったの
だろう。

そこで別の砂場へ行き、あわをつくったりして、バケツにあわを集める。あわを集めることで、彼らが先ほど味わった失望がいやされたと考えられる。それは、あわがバケツに一杯になるにつれ、「これでいいや」「いっぱいだ」「すげえ」と言い、昼食後にもまたやろうとしたことから推測することができる。そしてあわが満たされたバケツは、砂場のふちに並べて置かれたのである。この行為は、Kたちが満足してあわを集める活動をして
いたことが裏つけられるだろう。

事例（つづき）

ちょうどそのときKaが走ってきて、これらのバケツをけとば

す。Kaと一緒に走ってきた保育者はKaに向かって「片づけるのを手伝ってくださいのね」と言い、KとMには「だいいょうぶね」と言う。Mは「おれ、手、洗ってこよう」と言って、片づけをせずに、ひとりで部屋に入ってしまう。Kはだまってきた水たまりの中からどろどろの砂を出して、それを水たまりに向って投げる。再びどろどろの砂をとって、壁に向かって投げ
る。手を洗って部屋に入る。

考察Ⅱ

けれどもKたちの活動は再び中断されることになる。Kたちがいていねいに集めた、あわが満たされているバケツが他の子どもにひっくり返されてしまった。おそらくKたちの気持ちとしては「これでいい」と思ったであろう、その一瞬後の出来事であった。Kたちががっくりと肩を落としたのは当然である。さらに追いうちをかけたのは、保育者の行動であった。Kたちは、あわの入ったバケツを取っておきたいと考えていたのだが、保育者はKたちの気持ちを理解していなかったために、単に「だ
いじょうぶね」で片付けてしまったのである。Kたちの

活動は、またしても侵入者によって破壊されてしまったのである。そしてまた彼らは、残念な気持ち、怒りたい気持ちを侵入者に対してぶつけていなかったのである。

保育者という強大な存在が、侵入者を「片づけてください」と受容してしまったのであるから、ぶつけるところがなかったということであろう。Nはさっとこの場から去っていくが、Kは水たまりの中から、びしょびしょの砂の固まりを壁に向かって投げ、びしゃっと泥が散るのを見る。まさにこの活動は、Kの気持ちのあらわれと考えることができる。Kは、これを何回かくり返した後、この場を離れて部屋に入った。

こうして昼食になったのだが、午前中のKは、水を含んだ砂との関わりの活動を主にしていた。しかし昼食後、Kは全く水を含まない、さらさらの砂との関わりの活動が中心となった。

事例（つづき）

（昼食後）

Kはひとりで、たいこばしのところで乾いた砂を集めている。ふるいに砂が一杯になるとさあーとあける。乾いた砂の山の中に手をもぐらせる。砂を混ぜる。集めた砂を高く、山のようにする。その山の頂上に、シャベルで掘って取り出した黒い土をいれる。その上に乾いた砂をかぶせて、掌でとんとんと叩く。山をくずして黒い土と乾いた砂を混ぜあわす。その砂を再びふるいに入れてあける。これをくり返す。（二十分間、くり返す。）

突然立ち上がり、シャベルやふるいを置いたまま、園庭の中央にあるトンネルの中をくぐる。さっと出ると、そのまま三歳児の部屋に入り、ブロックを組み立て、ロケットをつくる。そのロケットを自分の部屋の棚の上に並べておく。そして、ブロックで遊んでいるクラスの友だちと話をする。こうして一日がおわる。

考察Ⅲ

昼食後、Kはひとりで、乾いた、さらさらの砂と関わった。砂という同質の物質であるが、それを白い部分と黒い部分というように対照的にとらえ、白い部分の中に黒い部分をいれて、その上を白い部分でおおって黒い部

分を見えなくしてしまふ活動をえんえんとくり返した。

黒い砂とは水を含んだ砂である。これを全く水分を含まない砂でつつみこみ、さらに混ぜあわせることによって、それらの砂は区別がなくなってしまう。このような活動をKはなぜ、長い時間くり返したのだろうか。

黒い砂は、水を含んだ砂であるが、これはKが午前中に主に関わった水分を含んだ活動としてとらえることができる。Kにとってみれば午前中の水を含んだ活動は、すべて拒否されたものである。拒否された後、Kは、午後には全く水を含まない砂と関わっている。Kは、拒否された行動とは逆の方向である白い砂を扱うという行動にうつっている。午前中に否定された、水を含んだ砂を混ぜあわせることによって、さらさらの水を含まない砂へと変えていく行動を何回もくり返した。こうすることで、Kは拒否された自分をプラスの方向へと転換させていったと考えられる。えんえんと続いたKのくり返しの活動は、Kが立ち直るために是非しなければならなかったのである。

Kは、自分自身を決した後、たいへん象徴的であるが、トンネルくぐりをする。そして全く新しい活動である。ブロックのロケット作りをはじめたのであった。

おわりに

砂遊びというと、すぐに思いつのがおだんご作りや、山や川づくりである。このような活動の結果や砂に関わる活動がどのように命名されるかということだけではなく、K男の場合のように、砂と取り組んでいく連続的な過程が、砂遊びにおける子どもの心の動きを明らかにすることに必要だと思われる。子どもが何気なくやっている砂に関わる活動のひとつひとつを分析することによって、子どもの活動の特性や発達特性を明らかにすることができると考えられる。

註(1) K・H・リード著、宮本美沙子・落合孝子共訳『新版幼稚

園 人間関係と学習の場』フレールベル館 昭和五十三年
P 二七八

(2) ドラ・M・カルフ著・河合隼雄監修 大原貞・山中康裕共訳『カルフ箱庭療法』誠信書房 昭和五十一年 P 1—2

ニュージーランドの幼児教育（二）

マイケル・クーパー

松川 由紀子・訳

II プレイセンター

ニュージーランドのプレイセンターは、第二次世界大戦時に始まったものである。幼ない子どもたちをかかえた多くの婦人たちの夫は、軍隊で海外に行っていた。婦人たちには子育て上の援助が必要であった。多くの婦人たちは集まってグループをつくり、子育ての時間をお互いに軽減するようにした。子どもたちは、ひとりの母親の指導者といっしょに遊んだ。婦人たちのグループは、子どもたちのために遊具を注意深く選択した。子どもたちが遊び仲間のなかで世話をされている間、ある母親た

ちは自由になり、幼ない子どもたちの世話にわずらわされないで買物に行ったり、他の用事をする事ができた。グループの婦人たちは週に一回集まった。他の母親たちが、彼女らの子どもたちが遊び仲間のなかで遊んでいる間、自由になることができるように、母親たちは交代で指導者を援助した。

グループの数が増加するにつれて、親たちは、指導者とともに遊ぶことは子どもたちにとって望ましいことである、と理解するようになった。年齢前教育部門として政府より認可を得ることになった。一九四八年、これらはナースリープレイセンターとして設置され始めた。ま

た、指導者を養成するための努力がなされ、一九四八年までに、子どもの発達について学習するために定期的な討論が親たちによってなされるようになった。この考え方が確立し始め、こうしたゼミナールグループを通じて養成された親たちによって運営されるプレイセンターは、子どもたちについて親が学習していくふさわしい方法であり、子どもたちにとってふさわしい学齡前の教育経験であるとして受け入れられていった。

プレイセンター運動の創始者の多くは、教師、教師の妻、大学の教員ならびに教育者たちであった。彼らは、一九二〇、三〇年代の進歩主義教育者たちの影響を受けていた。一九三七年、スーザン・アイザックスが講演旅行でニュージーランドを訪ねたが、彼女は、活動的な方法を導入する上で影響力があった。一九五〇年代初期のプレイセンター運動は、(フロイト後の)新分析学派ならびに、特にまた、親から分離されることは幼ない子どもたちにとって望ましくないと声明したと解釈された、ジョン・ボウルビーの仕事に強く影響されていた。これら

のさまざまな影響の結果、親が子どもたちの最良の教師であり、子どもたちの学習に関係をもつことは両親にとって良いことである、という哲学を生んだ。この時期の教育の影響は、次節で述べるプレイセンターの諸原則のなかに容易にみられる。

(1) プレイセンターの定義

プレイセンターは、子どもたちに学齡前の教育を与えることは良いことであると信じている親たちの組織である。彼らは、学齡前の教育を受けることは子どもたちにとって重要であり、子どもの教育要求について学習することは親たちにとって重要である、と考えている。プレイセンター運動は、子どもたちは遊びを通じて最もよく学ぶことができると考えている。特に、

。遊びは、確実な価値ある自己であることを子どもたちに感じさせる。

。遊びは、子どもたちの精神的かつ身体的健康を向上させる。

。遊びは、子どもたちがまわりの世界を理解していくのに役立つ。

。遊びは、子どもたちの伝達技能を発達させていくのに役立つ。

。遊びは、子どもたちの生活を豊かなものにしていく。

プレイセンターの親たちは、親が子どもの発達を理解して子どもたちの学習の過程に参加する時、子どもたちは最高に学ぶのだ、ということを感じている。親は、幼ない子どもたちにとって最善の教師である。

これらの原則が重要であるが故に、プレイセンターは二つの目的をもっている。

①各週一定の時間、子どもたちのために高い質の遊びのプログラムを用意すること。

②親たちがより良い親であり得るように、自己自身ならびに子どもたちに関するよりよい理解を得ていくように親たちを援助すること。

プレイセンターは、親たちの協同組織であるので、何ら教師や従業員は雇われていない。そこに働く人々は、

すべてプレイセンター運動の自発的な会員である。プレイセンターのスタッフは、第一にペアレントヘルパーとして、第二に助手として、第三に指導者として養成された親たち自身である。すべての親がプレイセンターに参加していくことが期待され、多くの親が、必要とされる多くの委員会のうちのどれかひとつの委員になっている。指導者には、彼らの所要経費を援助するためにわずかな金額が支払われている。ふつう、三時間のセッション（教育時間）につき、約一〇ドル（約一、九〇〇円）である。親たちは、子どもが参加するセッションに対してわずかな料金を支払う（一セッションにつき、約五〇セント、約八五円）。

プレイセンターは、関心をもった多くの親たちが、センターは自分たちの要求に合っていると考えて、子どもたちに学齢前の教育を与えたいと欲する時に、設立される。プレイセンターは、親たちが望まなければ設立されない。プレイセンターを始める時には、費用はかからない。多くの設備を必要としない。子どもたちの遊べる大

きな部屋があれば、どこでも設けることができる。政府の助成金を得るためには、最低設備基準に達していなければならぬ。政府は、プレイセンターを援助するため多くの助成金を交付している。助成金は、各プレイセンターあたり、

・プレイセンター協会に対する管理のための助成金
(年間) 三五〇ドル(約六六、五〇〇円)

・セクション運営のための助成金(一セクションにつき)
き)

・幼児一〇〜二〇名のプレイセンター 七ドル九〇

セント(約一、五〇〇円)

・幼児二〇〜三〇名のプレイセンター 十二ドル九

十五セント(約二、四六〇円)

・建物の維持費(床面積一平方メートルにつき、年間)

三ドル六十五セント(約六九〇円)

・プレイセンター設立のための助成金(設立時のみ)

四六七ドル(約八八、七〇〇円)

・両親養成のための助成金(年間) 三一五ドル(約五

九、九〇〇円)

(2)プレイセンターの基準

①建物 建物は、十分な空間をもった建物で、幼児たちにふさわしいものであれば、いずれでもかまわな
い。幼児ひとりあたり二・五平方メートルの室内空間な
らびに適当な室外遊び場が必要とされている。建物なら
びに遊び場は安全なものでなければならず、危険なもの
はすべて排除されていなければならない。

②子どもたちの年齢 子どもたちは誕生後いつから
でも参加することができるが、二歳半から五歳までの子
どもたちのみが政府助成金の対象となる。人数は一〇名
以上三〇名以内でなければならない。

③健康ならびに衛生面 幼児十五名につき少なくとも
もひとつの洗面所、一〇名につき少なくともひとつの手
足洗い場がなければならない。建物、設備、備品はいつ
も清潔に保たれていなければならない。また、水の便がよ
くなければならない。

④ 台所 お湯をわかしたり、子どもたちの食物や飲物を準備するための適切な設備がなければならない。

⑤ 室外遊び空間 子どもたちが遊ぶための適切な室外空間がなければならない。そこには、砂場、木登り、

ブランコ、スベリ台、走ったり飛んだりする場所が用意されていなければならない。また、管理しやすいように囲いがなされていなければならない。

⑥ 設備、備品 プレイセンターに通う子どもたちがそこで使用できなければならない。設備、備品の一覧表がある。

⑦ 時間 一セッションにつき最低二時間半で、どの幼児も最高週三セッションまで参加できる、という規定になっている。

⑧ 指導者ならびにスタッフ 幼児一〇名につき、指導者一名、ならびに指導者を援助する者一名、幼児十一名〜二〇名につき、指導者一名、ならびにペアレントヘルパー二名、幼児二十一〜三〇名につき、指導者一名、助手一名、ならびにペアレントヘルパー二名、がい

なければならない。平均して、幼児八名に大人一名の割合である。なお、二歳半以下の乳幼児には常にその親が同伴していなければならない。

(3) 養成の要件

指導者ならびに助手は、プレイセンターの養成コースを完了しているが、現に受講中の者でなければならぬ。そして、指導者として任命される前に、プレイセンター協会によって承認されなければならない。

親たちは、助手として養成される前に、ペアレントヘルパーとして養成を受けるように励まされている。すべての親が養成を受けるわけではないが、子どもをプレイセンターに常時通わせる前に、すべての親は、遊びならびにプレイセンターに関する四つの講義に出席しなければならない。

① プレイセンターにおける両親養成
プレイセンターにおける養成には多くの機能がみられる。

○両親は、プレイセンターのスタッフとして必要な養成を与える。

○両親に、子どもの発達に関して教え、子どもの行動を彼らが理解していくことを援助する。

○両親が、親業を楽しむためには、そして、良き親であるためには、どのようにすればよいのかについて、理解していくことを援助する。

プレイセンターの養成においては、何ら試験は行なわれない。親たちは、自分自身について、子どもたちについて、そして、子どもたちのために遊びのプログラムをいかに展開していくかについて学んでいく。親たちが自分自身について良き感情をもち、養成を楽しみ、仕事を楽しむならば十分である。どのレベルの養成にも、親たちが子どもたちの遊ぶあらゆる活動を試み、子どもの発達に関する講義を試みる、という実践的なワークショップが含まれている。養成には三つの基本的なレベルがある。

へ1 ぺアレントヘルパーのレベル

へ2 助手レベル

へ3 指導者レベル

〔原注〕ワークショップとは、親たちが子どもたちと同様に遊び、活動し、それからプレイセンターにおいてその遊び活動を用意するにはいかにすればよいかという方法を議論し、その遊び活動に関する子どもの発達上の重要なポイントについて論ずる、という勉学の時間のことである。

すべての養成はパートタイムでなされる。婦人たちは、子どもたちの世話をしながら、この仕事と勉学を続けていく。プレイセンター集団の一員になるといっては、ふつう、彼女ら自身、学齢前の幼児をもっているのであるから。なかには、仕事を完了したり、良き親であり続けることがむつかしい婦人たちもみられる。ある人がプレイセンターを指導していくようになる前には、すべての仕事が完了されていなければならないし、プレイセンターのセッションの指導は高い水準のものでなければならぬけれども、既述したように、何ら試験は行われないのである。

② 養成計画

〈第一レベル〉ペアレントヘルパーの養成

希望者はすべて、以下の要件を満たさなければならぬ。

○子どもたちの遊び活動に関するワークショップに、少なくとも六回出席すること。

○子どもたちの遊びに関する観察を十回行ない、記録し、それらについて討論すること。

○自由遊びならびにその重要性について討論すること。

○指導者による指導ならびに問答のもとで、ひとつの完全なセッションを観察すること。

〈第二レベル〉助手の養成

希望者はすべて、以下の要件を満たさなければならぬ。

○指導者を援助する者として、二十回完全なセッションで働くこと。

○子どもの発達に関する一連の講義に、十六時間出席すること。

○プレイセンター教育活動に関する一日コースに、二回出席すること。

○応急手当について学ぶこと。

○あるひとりの幼児についての研究を完了し、これについて論じること。

○実践的なワークショップに八回参加すること。

○他のプレイセンターを少なくとも二カ所訪問し、そのセッションを観察すること。

〈第三レベル〉指導者の養成

まず助手の養成コースが完了されていなければならぬ。それに加えて、希望者はすべて、以下の要件を満たさなければならぬ。

○セッションで二十回申し分なく働くこと。そのうち五

回は指導者として働き、試験官による評価を受けなければならない。

○子どもの発達に関する講義の上級コースに出席すること。

○いかに人々がお互いに関係し、伝え合っているのか、

という人間関係ならびに家族関係に関する講義コースに出席すること。

。子どもの言語発達に関するセミナーに二日（あるいは週末に）出席すること。

。子どもの権利について学ぶこと。

。幼稚園、児童保育センターなど他の学齢前の幼児のための教育、保育機関を三カ所訪問し、観察事項をレポートすること。

。あるひとりの幼児に関する子ども研究を完了すること。

。ブロック、砂、水遊びなど、プレイセンターにおけるさまざまな遊び活動に関する研究を完了すること。

プレイセンターのセッションは、指導者によって管理されている。指導者は教師よりも広い役割をもっている。子どもたちが建設的に遊び、学ぶように、指導者はセンターを整えなければならない。指導者は、また、親たちが子どもたちについて学び、セッションの運営に参

加していくように、援助しなければならない。指導者の仕事は、親たちならびに子どもたちの双方にかかっている。

(4) プレイセンターの組織

プレイセンターはそれぞれ独立したもので、それぞれが管理規則をもっている。政府の助成金を受けるためには、高水準の組織ならびに教育実践に達していなければならない。地域のプレイセンターは、すべてプレイセンター協会の会員である。ニュージーランドには、二十八カ所のプレイセンターがある。プレイセンター協会はすべてプレイセンター連合に加入している。連合は全国的な団体で、支払われる助成金の水準ならびに期待される基準に関して、政府と交渉する団体である。プレイセンター連合には、プレイセンターの基準の改善を援助していくいくつかの委員会がある。主な委員会は、

。設備委員会……プレイセンターで利用できる設備の變更に関して目をみはっている。

。教育委員会……養成面を指導し、それに関する考え方を普及させる。

。建物委員会……プレイセンターにふさわしい建物の種類を論じ、政府と建築計画について交渉する。

それぞれのプレイセンターから選ばれた親がプレイセンター連合に務める人員を選ぶ。なお、秘書には謝礼金が時には支払われるけれども、既述したように、プレイセンター組織のなかには給与の支払われる従業員は全くいない。

(5) 親の役割

プレイセンターは会員の親たちによって設立され、管理される。委員会がセンターを管轄するが、ふつう、すべての親が委員会の委員である。それぞれの親が委員会のなかで役割をもつ。プレイセンターの委員一覧表は、次の通りである。

。指導者ならびに助手
。情報委員……プレイセンターに関する諸事項を親たち

に伝える人。

。広報委員……プレイセンターの存在を地域に広報し、参加を呼びかける人。

。設備委員……設備を整頓しておく人。

。建物委員……建物の維持、管理をする人。

。図書委員……図書の世話をし、遊びならびに子どもの発達に関する両親用の図書を常備する人。

。会計委員……金銭の管理ならびに資金集めをする人。

。秘書……書簡の世話をする人。

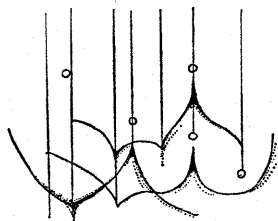
。会計……委員会の議長でもある。

親たちは、それぞれのプレイセンターに関して責任をもつが、全国的な組織ならびに政府によって定められた基準に合致していなければならない。これらの基準は、プレイセンター運営管理合意基準と呼ばれているものである。親たちは、センターのスタッフとなって、政府の助成金によってはまかなえない設備を購入し、経費を弁済するために、資金を集めたり、センターの活動が地域社会の人々に知られるように務めるのである。(続く)

アメリカの若者の経験

——現代世界の一断面——

足立 寿美



「コモン・センス、それで判断すればいいんじゃない？」

あら？ 私は突然きき耳を立てた。夜の高速道路でパツテリを切らして動かなくなった私の車を車庫まで運んでもらうトリーリング・トラックの中である。そうっと隣の若者に視線を合わせたトタン、小降りになった雨の打つ窓にいなびかりがノコギリの歯型を描く。と、パシフィック・オーションの水平線がぐっと盛り上って、それを背景にした黒い巻毛の涼しく整った青年の横顔が浮び上る。

「夜だからサ、外の車にエンコ車の存在を知らせるため

にライトを残す、四つ角だから坂を登ってくる車が見通せるようにたつぷりと視界を残す。なんてことないよ。

コモン・センスを使うことサ。ね、気がついた？ パトロール・カー。あれで我々の到着が一・二秒遅れていたらこの二点で二・三万近い罰金取られたんじゃない？」

私の車はこの坂道を登り切る直前で完全にストップした。私のコモン・センスもここらあたりで完全に停止した。

「僕はね、現代のアメリカ社会がこんなに住みにくくなりつつある一つの理由はコモン・センスの使用を拒否す

る人間が増えたからだと思うよ。それに、学校教育にだって、こいつを育てる場がないじゃない？」

並の人間が眠る時刻に、トラックの運転をして生活を営む若者は、講演会のマイクロフォンを前に据えて沢山の聴衆にきかせたいようなことを口にした。音質の高いカー・ステレオから十二才になる娘がごく最近ききはじめたステーションのポピュラー・ミュージックが流れる。

夜の仕事で身についた習いであろうか、暗闇の中で動かなくなった車の傍でトラックの到着を待つて焦ら立つ人間を相手にすることから自然と備った技術であろうか、若者は話し好きであった。

「僕ね、去年七万五千マイル運転したんだよ。つまり約三十回にわたってアメリカ大陸を横断した計算になるんだけど無事故。車体にカスリ傷ひとつつけることすらしてない。今年はまだ三週間あるから去年の記録をちょっと上廻りそうだ。エッ？ 秘訣？ それはホラ、今前にラビットが走っているじゃない、こうやってハンドルを握りながらもしあの車が何らかの原因で事故を起こしたら

と様々の状況を考えそれに応じたトラックのハンドル・ブレーキの扱い方を考える、もう習慣になってるね、そうするのが……」

過去三年こんな風に土曜日を除く毎日、夕方六時から朝六時まで働くというのでさぞ大変な苦勞と勝手にきめ込んで同情すると、

「好きでやってるんだよ。運転するのが大好きなんだよ。この仕事をしていりあまあ存分にハンドル握ってられるじゃない。それに夜中ならスピードも出せるしね。収入？ そりあ並の人間のやりたがらない時間に働くからいいよ。月千五百ドル越えるかな。でも、金だけが目あてじゃあちょっと長続き無理なんじゃない？」

青年の車運転好きは、八才の時、父親から「やってみるかい？」と云われて自力で運転した経験にはじまったそうである。幼い車気狂いの男の子には、グイグイとギア・シフトをしていく右手の動き、それとリズムを合わせてクラッチを踏む足、じっとしているかと思うと急にずらしてブレーキを踏む右足、こうした父親の手足の動

きを眺め続けた時間がかなりあったことだろう。それに続いて両親の真似をして隣で呼吸を合わせて両手両足を動かす、そんな遊びの期間もあったことだろう。若い父親はそうした我が子の足がベダルに届くやいなややってみるかいと自分の座にすわらせた。大きくなれば何時か僕もと憧れの眼で眺め続けた『お父さんの座』に収ったその瞬間の感激と誇りは想像に難しくない。「いいかい？　大きくならなければ車を運転出来ないといった所で、これは簡単なんだよ。車の動かし方はちゃんと一定のルールがあるんだよ。車は生き物じゃないから自分では動けない、だからガスを送ってやらなければね。そのためにベダルを踏む。それも一度にボンとひらいて沢山やったのでは、車輪が廻りすぎるから少しやる。それから車は重いだろう？　だから止っている時に人間の力だけでハンドルを切って車輪を右と左にと動かそうとする」と大変な力がある。でも一段動きはじめるとうんと少い力で済むんだよ。止める時は動かす時の反対で、足を踏んで送ったガソリンさえ使い切ってしまうば自然にスト

ップする。何かの理由で例えば犬が前を横切るとか、誰か人がいる時はガソリンが燃え切るのを待っていたんでは間に合わないから車輪、動きを止めるためにブレーキを踏む。いいかいこんな風に目の前や後の情況に応じて手足を動かすにはね、常に準備をしておくんだよ。車って大きくって大人しか運転出来ないといったって簡単……。八才の、コモン・センスで十分なんだよ。さあやってみよう」とでも云ったのであろう。

暗闇の中で隣からきこえてくる声でこんな情景を一人勝手にしたのは、『小さな事でも自力で解決を試みやり遂げるといふ経験が自信を生む。それが次にはもう少し程度の高いものへと挑戦してみようとの気力を育てる』との青年の見方と『自分の両親は知っている人間グループの中で一番コモン・センスがある』との批評からだ。ふと私の娘の姿を思い浮べる。その子は日本で育った母親の価値観と、アメリカ社会のそれとのひらきに気づき、最近はどこらかというママミーはちょっとクレイジーと感じているような傾向があった。この子は大きく

なつて彼女自身が親となる年令に達した頃、私のことを
どんな風に描写することであろう……。

In childhood nothing is banal; inexperience means
a capacity to be perpetually stimulated. // 幼年期、そ
こでは何年といえどもありふれた出来事ではありえな
い。無経験は絶え間なく始終刺戟される立場を意味する
のだ。誰の云った言葉だつたらうと思いつつ、毎日に
新しい知恵知識を身につけていく幼年期に、ふとした父
親の思いつき、力のシンボルのような車を自力で動か
す。経験がこの青年の魂づくりにつながつた過程を思
う。一つの幼児体験が人間形成へと一直線に結びつく。
それはよく想い出ばなしにきくことであつたし又伝記に
もみられることなのだが思いがけない場所で思いがけな
い人の口々からきくことに、あらためてこの過程をみつ
めてみたい気持になつた。そんな私に、キモの入つた若者
はトラック運転手の生活振りをこと細かく説明してくれ
た。夜と昼、それが逆になつたとはいふものの彼の生活
は見事なまでに規則を知つてゐる。六時の仕事終了と共

に朝日の中を八マイル海辺に沿つてジョギング。禁酒、
禁煙、八時間睡眠。食事はこうした職種の人間が好むフ
ースト・フード、つまり健康自然食という。話がこの
あたりまで進んだ頃にはアメリカの新世代の新しい人間
像に行きあつたのかとこの青年を取りまく友人達へと関
心が湧いていた。つまりこの社会が大きく動いた一九七
十年代からはずれたグループである。然しこの青年は友
人よりも恋人の話をしたがつた。

「ルネの為ならなんでもする覚悟。本当にいい奴。彼
女、医学部志願なんだ。だから僕目下教育費貯めてんだ
よ。両親が出てやると話は纏つてゐるんだけどサ。結
婚したらこりあ僕の責任じゃない、ね。この先の町に買
つた家現金払いたもんで、何しろ銀行に十二パーセン
ト、十三パーセントの利子払う馬鹿なことしたくないか
らサ、貯金減つたけどそれでもあるぜ。もしも僕の身の
上に何か起きた場合は両親に恩返し出来なくなるからこ
の間六十万ドルの生命保険に入つて迷惑をかけることが
ないように葬式の前払いもしたんだ」

この南カルフォニアは住宅が異常に高い。若い夫妻は共稼ぎしてくだびれ切ってアパートを長期担保で買うのが珍らしくない。そんな中で現金払い、然も葬式の手続きも支払いもしたときいて私はもうただ嘔然とした。青年はルネとの育児計画を述べていく。

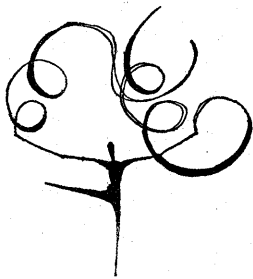
「子供は二人つくる。一人っ子というのはどうしてもかたわになるから。子供は子供同志でしか鍛え合えない部分があるからサ。教育方針は基本的には一本、つまり出来るだけ子供と一緒にいる時間を長くする。彼等が大きくなった時に両親がどこか傍に、必要な時にいつもいてくれたと思ひ出せばいいんじゃない。僕としては親の責任として小さなことを通じて自力で物事を処理する経験の場をつくってやる、これもコモン・センスだろうと？ 簡単なことだよね」

簡単なことを私はなし得たであろうかと我が子を一人っ子にした私は、奥さんのルネがお医者様になった時御主人がトラックの運転手では困ることもあるのではとごく常識的質問をすると、その頃には弁護士になるための

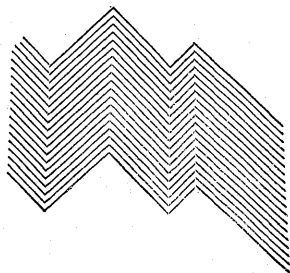
細かい時間計画と経済プランが立っていた。私はこの若き哲学者教育学者の顔をまじまじと眺め入った。

「僕の両親？ 父は出版会社の販売責任者、母は家にいる。二人とも百パーセントイギリス人サ」と誇りたかく答えるアメリカ人の名前はジムといい、年令は二十一才になったばかりという。「これがアメリカ……」と一種の感銘にも似た感情に、連続的な稲妻と雷が折り重なり合った。

※足立寿美さんは、日本で児童のことを勉強した後、フルブライト留学生として米国と欧州に留学。アメリカ人のご主人が亡くなった後、チェコスロバキアの医師と結婚、現在カリフォルニア州サンディエゴ在住。アメリカとヨーロッパにまたがって活躍しておられます。



エリクソンと幼児教育 (17)



仁科弥生

同一性の形成 アメリカの場合(二)

アメリカの子どものしつけを情緒障害との関連において考察したエリクソンは、産業化とともに始まった機械的なしつけ方に批判的である。彼によれば、そのしつけ方には、人間をまるで産業界の規格化された付属品にするかのような、人間の身体をその誕生の直後から時計のような正確さで日課に適合させようとする傾向があり、その結果、それは子どもを標準化し、調整しすぎることになった。つまり、そのしつけは、アメリカ人のもっとも顕著な特質である個人主義を育てるところか個性の仮面を大量生産するという危険を冒しているというのである。しかも、清潔や整頓、時間厳守などのしつけにあたって、母親たちは、できるだけ早い時間に子どもを「条件づける」ことが一番よいという「行動主義者」の唱える科学的スローガンにためらうこともなくとびついた。非常に幼い頃に訓練すれば最小限度の摩擦で、子どもは自動的に従うようになり、しかも最大の効果をあげるこ

とが期待できるという学説は、彼女たちにはもっともなことに思えたからである。しかし、子どもが自分自身を調整する能力をもつようになる前に子どもを条件づけようとして始める排泄のしつけやその他の訓練は、一方では子どもの自律性や自発性の発達を阻害する危険性をもはらんでいた。したがって、将来、一市民として自由な選択を行使用することを期待されている人間を育てるには、このようなしつけ方は不適切である、とエリクソンは結論する。(『幼児期と社会』)

このことは、子どもたちが成長の過程で経験する生活の非連続の一つの例でもある。先に触れた自然児ジョン・ヘンリーは、成長して一人前の打鋳工になり、男らしい男はどんな機械にも劣らないという心意気をみせて、蒸気ドリルに対抗して一命を落としたという伝説の主人公になっている。彼は人間は人間としてのみ価値があるのだという信念を最後まで貫いた男であった。このヘンリーに象徴されるかつての開拓者の子どもたちは、今や機械に奉仕しなければならなくなった。そして近代生活

の非個人的な機構の中で身動きのできなくなった自分に気づいたとき、青年たちは役割の、そして同一性の拡散状態に陥るとエリクソンは分析する。

すでに述べたように、青年期において、未来がはつきりした人生計画の一部となる。若者の第一の関心事は、自分はこういう人間であると描く自己像と比べて、広い世間の、また自分にとって大切な人々の目に映る自分はどうなる人間だろうかということである。また、幼い頃から育ててきた自分の夢や希望、個性や技術をどのようにして、実社会の現実の職業や性の規範などに結びつけることができるだろうかということである。しかし、ここで若者は大きな危機に直面することになる。なぜなら、彼は自分の職業の選択については自由であるという暗黙の約束を信じていた。また自由な選択と決定という文化的同一性が彼の自己抑制にバランスを与えてくれるだろうという期待もあった。ところが青年になり大人になつてみると、機械や機構との対決を迫られるからである。それらは複雑で、理解しがたく、その上、非人間的に独

裁的な力で彼の職業趣味を標準化する。若者は、容赦のない画一化によって押しつけられる役割というものを、自分を拘束し、類型化し、自分が魅力を感じる色々な可能性から自分を閉めだそうとしているものと受取り、彼の心に葛藤が喚起されるからである。そうして、誰も彼もさまざまな形で逃避しようとする。学校を中途退学する。仕事をやめる。人を寄せつけない気分に関じ込み、孤立する。時には非行的、逸脱的、自己破壊的行動に走ることもある。

エリクソンは、その具体的な例として、ヒッピーやビート族と呼ばれる若者たちのグループをあげている（『エリクソンとの対話』一九七一年）。すなわち、若者たちは自己の同一性を確立するために、色々な可能性に自分をかけてみようとする。しかし、大学への進学、昇進、高所得などを指向する社会的圧力が彼らの試みを一層困難なものにする。そこで、社会の要請や文化的同一性の諸要素を自己の同一性の中で調和させることができず、しかも自律性を誇りとし、自発性に溢れていると自認す

る若者は自分なりのやり方で自分に適する道を歩もうとする。そのようなモラトリアムを象徴する社会現象の一つとしてヒッピーやビート族、或は平和部隊をとらえることができるという。

ちなみに、津留らもヒッピーやビート族を次のように考察している（『青年期の比較文化的考察』一九七三年）。すなわち、彼らの多くは自分の出身階層である中流階級の価値観、たとえば賞賛や成功指向の考えに背を向けている。彼らが脱体制運動に参加することは、個人が数理化され、画一化されることに反逆し、産業化された大衆社会の価値を拒否しようとすることを意味している。また彼らが清潔を無視し、ものを共同所有し、愛や美を至上とすることは、中流階級の清潔を強調し、時間を厳守し、私有財産の獲得にこれつとめ、愛情までも出しおしむという価値観に反逆しているのである。また性交、マリファナ、麻薬に耽溺するのは、清教徒的な中流階級の倫理への反抗に他ならない。しかし、彼らの多くは、数ヵ月か数週間、そのような活動に参加するが、やがて再

「もとの中産階級の生活に戻っていくという。世界各地で奉仕活動に従事する平和部隊は、若者が自己を発見するために、一時的に家族、学校、職場から離れる機会を与える。そこで若者は自分の価値観や他人との関係を問いただす必要にせまられ、また新しい技術を学び、新しい考えや環境と出会い、心理的に成長をとげ、自己同一性を発展させることができる。いずれの場合も、モラトリアムとして、若者たちに、彼らが既成社会の圧力から一時的に解放され、人生や社会への新しい見方やかわり方を見いだしていく機会を与えている。

青年期のそのような危機の過程で、若者たちの中には精神医学的治療を必要とする者もいる。すでに触れたように、アメリカでは独立歩歩の同一性が強調される。それだけに、若者は成功も失敗も自分一人の責任で果たさねばならない。そのために情緒的葛藤も一層深刻なものであると思われる。エリクソンはオースティン・リックス・センターでそのような若者たちの治療にあたった。彼らについて次のような考察を行なっている（『自

我同一性』一九七三年）。

これらの若者は自分たちの社会から与えられる制度化されたモラトリアムを利用することもできず、かといって自分独自の猶予期間を自分の手づくりだすこともできずに、精神科医のところを訪れたのである。彼らは、自我が同一性を確立する能力を、一時的にせよ失う結果、「急性の同一性拡散」状態に陥っていた、とエリクソンは分析する。この状態は、従来、前精神分裂病とか、妄想的、抑うつ的、精神病質的、その他の傾向を伴う重症の性格障害と診断されるのをつねとしていた症状であった。そして、それは、若者が「肉体的な親密さ」や「決定的な職業選択」「激しい生存競争」「心理・社会的な自己定義」などに同時に自分を賭けることを要求されるような諸経験に身をさらす自分に気づくときに、顕在化すると説明されている。

たとえば、ある女子学生は、保守的な母親によって過保護に育てられていたが、大学に入って背景の決定的にちがう青年たちと出合うことになった。彼女はこの青年

たちの間で親しい友を選択しなければならなかった。とりわけ、性関係で、根本的に異なる慣習に協調するか、拒否するかを選択せねばならなかった。しかも彼女は両親のどちらかがひそかに郷愁を抱き、しかも表向きはそれらを軽蔑している価値観や生活ぶりだが、まったく異なる青年たちによって、ころよさそうに示されていることに気づいた。そして葛藤を伴う同一化をせまられ、心理・社会的な自己定義にあたって「選択の回避」を選んだのであった。それは外的な孤立と内的な空虚の感覚を引きおこし、彼女は退行の症状を示したが、さらにそれに続いて一種の麻痺状態をも起した。これを引きおこすメカニズムは、現実的選択を最小限にした状態を維持しながら、自分はいつまでも選択者のままでいるという内の確信を最大限にしておこうとする自我の働きである。そして、エリクソンは、このような同一性の拡散状態が青年期や或は成人前期という年代で起るのは、親密な仲間関係、競争、或は性的な親密さにかかわろうとするときに、潜在的な同一性の脆弱さが完全に顕在化してしま

うからであると説明している。つまり、他人と本もののかかわりあいを結ぶことは、確固たる自己確立の結果であると同時に、自己確立の試練でもある。この自己確立がまだの場合、青年は、友情や性的な遊びなどの形での遊戯的な親密さを求めるときに、このような暫定的なかわりあいが、同一性の喪失を引きおこしそうな対人的融合になってしまうのではないかという不安におそれる。そのために、そのようなかわりあいを控えたり、自分を内的に孤立させたり、せいぜい表面的な対人関係をもつだけになってしまう。時には逆に熱狂的なかわりあいを繰返し求めては失敗し、陰うつな挫折状態に陥ったり、一番親密になれそうもない相手と親密になろうとしたりすることもあるという。エリクソンはこの親密さの問題を成人前期の課題として位置づけているが、それについては女性の同一性の問題とあわせて別の回で触れてみたいと思う。

或は、同一性の拡散が原因で、自分の勤勉感覚の急激な崩壊に悩むという症例も紹介されている。それは、周

りから課せられたり、指示された課題に集中できないという形をとったり、読書過剰のような一面的な活動への自己破壊的な没入という形をとるといふ。患者の中には退行して、エディプス的な競争の問題が台頭し、集中能力の低下だけでなく、自意識過剰や競争への固執を伴う場合もある。たとえば、自分のことを大学に閉じこめられていと思うようになった青年は殆ど本ばかり読んで、失明しそうになった。それほどに彼は大学教授であった自分の父親に破壊的な過剰同一化をおこしてみたのである。彼は工夫に富んだ作業療法の中で、勤労感覚を取りもどすことができるような活動を見いだした。つまり彼は、自分が生まれつきすぐれた絵の才能をもっていた事実気づいた。そしてこの描画が少しずつ彼自身の同一性の感覚の獲得を助けることになったと報告されている。

同一性感覚の喪失は、自分の家族や、身近な環境から、望ましいものとして示される役割に対する青年のきびしい軽蔑や憎しみという形で表現される場合もあると

いう。エリクソンはこれを否定的同一性の選択と呼んでいる。患者たちは同一性を放棄する代りに否定的同一性を選ぶのである。ある症例では、病的に良心的な両親から要求されるか、実際に実現されるかした極端な理想像に対抗して、自分自身の理想像の活動範囲を見いだし、それを固守したいという要求から否定的同一性を選んでいく。しかもこの場合、両親の弱さや隠された願望が子どもにはっきりと見抜かれてしまっている。たとえば成功した興行師の娘が、大学から逃げだして、南部のある都市で売春婦として逮捕された例や、南部の有力な黒人牧師の娘がシカゴで麻薬常習客の中にいるところを見つかってしまった例がある。これらについてエリクソンは次のように述べている。「このような場合、これらの役割を演じることの中に潜む、冷笑的、復讐的な見せかけに気づくことが、もっとも重要である。なぜならば、この白人の少女は、実際には売春をしていなかったし、その黒人の少女もまだ実際には常用者になってはいなかったからである。しかし、彼女たちがいずれも自分から社

会の底辺に身をおき、このような行動に対して烙印をおす決定権を、司法、執行機関や、精神医学的な機関に委ねてしまったのは事実だからである。……つまり否定的同一性のこの種の復讐的な選択は、利用可能な肯定的同一性の各構成要素が、お互いに帳消しにあらうような状態の中で、明らかに何らかの自己支配力を再獲得しようとする絶望的な企てである。そして、このような選択の歴史は、患者の内的手段によっては達成不可能な肯定的役割から現実感を得ようと努力することよりも、想像したこともなかったようなものとの同一化から、同一性の感覚をひきだすことの方がよいたやすいような、そんな一連の状態の存在を示している」(『自我同一性』)

さらに患者の家族と幼児期における特殊要因として、彼らの親たちに共通する特性をエリクソンは次のようにまとめている。母親たちはより高い地位にのぼろうとする身分意識が強く、また、見かけだけの財産や「幸福」のために、誠実な感情や知的な判断上の問題を容赦なく切り捨ててしまおうとする。そして子どもたちに「ま

もなことをよるこぶ」社交性という見せかけを身につけさせようとする。しかも彼女は哀願的に、侵入的に子どもを愛する。また、人に認めてもらいたい要求の強い彼女たちは承認や是認に飢えると、幼い子どもたちにもいった不平や父親に対する不満を聞いてもらおうとする。そして、子どもたちに向って、子どもたちの存在によって自分の存在が正当なものになるようにと嘆願する。また、非常に嫉妬心が強く、とくに子どもが父親に同一化しようとする試みや、子どもが自分の同一性の基礎を父親の同一性に求めようとする試みに対してはげしい嫉妬を向ける。これについて、エリクソンはとくに重要なこととして次のように述べている。「さらに付け加えねばならないのは、これらの母親が患者に対してとりわけ嫉妬深いことである。つまり患者たちは、(はじめから)母親からしりごみすることで母親を傷つけてしまうのであるが、ひとえにそれは、母親と患者の極端な氣質のちがいに耐える力がお互いにないためにおこる。ところが実はこの氣質のちがいは本質的な親和性の極端な

形での現われにすぎない。つまりこの親和性とは（引きこもろう）（または衝動的に行動しよう）とする患者の過剰な傾向と、母親の過剰な社会的侵入性とは、ともに高度の社会的な脆弱性という点で共通しているという意味である。父親が自分から女性を引き出しそこねたという、母親の執拗な訴えの背後には、患者（子ども）の方が自分から母親を引き出せなかったのだという訴えが存在し、深層心理としては母と子の双方にこのことが気づかれているのである」（『自我同一性』）そこには、母親の未熟で自己中心的な、しかも自己不全感に悩む人間像が浮き彫りにされている。

父親は成功者で著名な存在である場合が多いという。しかし彼らは妻たちに対して過剰な母親依存の傾向をもつので、家庭で妻たちに逆うことはない。その結果、父親もまた、自分の子どもに対して深層では嫉妬深い。また父親の指導力が発揮されたとしても、それは妻たちの侵入性には屈服し、或は妻を避けようとする。そこで母親が子どもたちに向ける要求はますます貪欲になり、哀

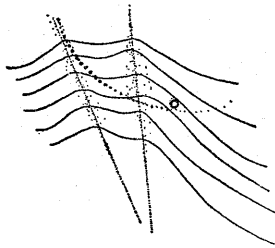
願的になっていく他はないという。そこには子どもにとって精神的緊張がいやが上にも強いられたと結論せざるをえない環境が明らかにされている。

エリクソンらは、センターで、同一性の拡散をもとにする患者たちの諸要求に対応する治療計画として「作業療法」「芸術療法」と呼べるようなプログラムを企画し、若い患者一人一人に、彼らがすでに放棄してしまっている活気にあふれた自我の諸機能の再建に対する支持を提供するという課題に取りくんたのである。患者たちはその病院社会の中で、社会的な実験行為の第一歩を始めた。そこでは、患者自身の、そして仲間患者の、さらに病院スタッフらの要求に適切に対処しようとする共同体の計画に従ったり積極的に参加することが、その共同体における人々の権利や義務として、患者たちにも要求された。彼らは企画をし、作業をし、奉仕をした。ものを作り、与え、人々を楽しませた。「不信以外の何もかも信頼すまい」という患者の決意の中にも、信頼に満ちた相互性を取りもどすための新しい経験を求める気持が

あった。治療者は、人生が信頼するに足るものであることを赤坊に教える母親の役割を引きうけた。また、親密な相互性や、その対極にある、自分にとって危険とみなされる人や力を分別をもって拒否することを彼らが再学習するための案内役となった。彼らは治療の過程で、特有な悪化の一時期を経験することもあった。エリクソンはそれを、「どんだ底の態度」と呼んでいる。それは、退行の究極的な限界であると同時に、新しい再進展にとっての確固とした基盤となるどんだ底を模索する試みでもあると解釈されている。そして彼らは転移と抵抗を繰返しながら、自分の輪郭をもう一度はつきりさせる、つまり自己を明確化することによって同一性の基礎を確認し、同一性の感覚を獲得していったという。また病院環境として、受容的な看護婦や協力的な仲間患者、広範囲な活動をする有能な生活指導者たちとの出会いと支持が不可欠であることも報告されている。

参考文献

- Ericson, E.H., 『幼児期と社会』 仁科訳 みすず書房 一九七七
- Ericson, E.H., 『自我同一性』 小此木訳編 誠信書房 一九七三
- Eyans, R.I., 『エリクソンとの対話』 岡堂、中國訳 北望社 一九七一
- 江藤 淳 『成熟と喪失』 講談社 一九七八
- 津留宏編 『青年期の比較文化的考察』 金子書房 一九七三



『邦訳 日葡辞書』 ⑬

——わが国中世の児童文化史研究によせて——

M・M・M

X字で始まる語

シャクリ (噓)

泣きじやくり・しゃっくり

(例) シャックリヲ スル (噓をする) 泣きじやくり・

しゃっくりをする。

シャクリ (赤痢)

血便の出る下痢。

(例) シャックリノ ワズライ (赤痢の煩ひ)

この下痢の病氣。文書語。

シャクシ (赤子)

アカゴ (赤子) に同じ。生まれて間もない乳児。

シャキヤウ、またはコノカミ、またはアニ (舎兄、またはこ

のかみ、または兄)

年上の兄弟(兄)。

シャテイ (舎弟)

オトウト、オトト (弟、またはおとと) に同じ。年下の兄

弟(弟)。

セガキ (施餓鬼)

シチガツニ オヤノ タメニ スル マツリゴト (七月に

親のためにする祭事) 死んだ父母のために行なう、ある儀

式や慰霊の行事。

(例) セガキラ スル (施餓鬼をする) 法事、または儀

式を行なう。

セガレ (倅)

若者。父親が自分の息子を呼ぶのに使う語、または、人が

自分自身のことを卑下したり謙遜したりして言う語。▼次

条

セガレ (倅)

また、少年。▼コセガレ

セガレメ (倅め)

右の条に同じ。軽蔑をこめて言う。

センバラ (先腹)

最初の妻。また、最初の妻の産んだ子の意味に解される。

(例) アレハ センバラヂヤ (あれは先腹ぢや) あれは

先妻の子である。

センビ (先妣)

シンダ ハハ (死んだ母)

(例) センコウセンビ (先考先妣) すでに死んだ父と母

と。▼センコウ

セキヂョ (石女)

すなわち、ウマズメ (石女) 子を孕まない女。

セキリノシン (戚里の親)

母方の親戚。

セキシ (赤子)

アカゴ (赤子) 乳飲み子。文書語。

シボセン (子母銭)

コハハノゼニ (子母の銭) すなわち、リセン (利銭) 利

子としてやる銭。

シチゴサン (七五三)

盛大な宴会で、この時には七膳、あるいは、三膳が据えられる。その一膳には七種、一膳には五種、もう一膳には三

種の料理が載っている。

(例) シチゴサン ノフルマイ (七五三の振舞) 右に

同じ。

シジ (指似)

子どもの陰莖。婦人語。

シマイ (姉妹)

姉と妹と。

(例) シマイ ケイテイ (姉妹兄弟) 姉と妹と、およ

び、兄と弟と。文書語。

シモバレ (霜腫れ)

寒さのために手や足が腫れること。すなわち、凍傷になる

こと。

シンブ (親父)

チチヲヤ (父親) 父。

シンシン (親子)

ヲヤトコ (親と子) 父や母と子どもと。

シロコ (白子)

白っぽい子ども。または、全身白色の子ども。

シソク (子息)

息子。

シソン (子孫)

コマゴ (子、孫) 子孫。

(例) シソン ハンジャウ (子孫繁昌) 子孫の増加・繁

榮。

シツケ (為付け)

修練、または習わし。また、育ちがよく、礼儀正しいこと。

(例) シツケノ ヨイヒト (為付けの良い人) 立派に育

てられて、礼儀正しい人。

シツケ、クル、ケタ (為付け、くる、けた)

し慣れている。また、くつつける、あるいは、取りつける。また、父親が息子に家を与えたりして、用意を整えてやる。

シツケガタ (躰方)

礼儀作法とよい教育や習慣に属する事柄。

シツケシャ (躰者)

礼儀正しい作法をよくわきまえている人。

シテイ (師弟)

シシヤウト デシ (師弟と弟子) 師と弟子と。

シト (尿)

小便。

(例) シト スル (尿する) 小便をする。一般に子ども

について言う。

シシ (しし)

子どもの小便。婦人語。

(例) シシヲ スル (ししをする) 子どもが小便をす

る。

シシソソソ (子々孫々)

子どもと孫と、すなわち、子孫。

シシヤウ (四生)

ヨサマノ シヤウジ ヨウ (四さまの生じ様) すなわち、
タイシヤウ、ランシヤウ、シツシヤウ、ケシヤウ (胎生、
卵生、湿生、化生) 四つの生まれ方で、次のとおりであ
る。第一は交尾・交接により、母の胎内から姿形を備えて

出るもので、これを胎生という。第二は、卵によるもの、
すなわち卵生である。第三は、鼠や虫など、腐敗によるもの、
すなわち湿生である。第四は、魚から獣になったり、
または、ある獣が他の獣に転換したりして生ずるもの、す

なわち化生である。
シツシヤウ (湿生)

クサリ ウマルル (腐り生まるる) 鼠、虫、その他これに
類するものが、腐れ朽ちることによって生まれること。仏

法語。

シヤウ (生)

すなわち、ウマルル (生まるる) 出生、または、生まれる
こと。

(例) シヤウヲ ウクル (生を受くる) この世に生まれ

る。

シヨウドウ (小童)

ヲサナイ ワラベ (幼い童) 小さな子ども。

シヨウチヨ (少女)

ヲサナイ ヲンナ (幼い女) 女の子ども。

▼シヨウニヨ

シヨウジン (小人)

チイサイ ヒト (小さい人) 子ども。また、無知で学問の

ない人、または、徳義のない人。

シヨウネン (少年)

ワカイ トシ (少い年) 若者の年ごろ。

シヨウニヨ (少女)

または、シヨウチヨ (少女) とも言い、むしろその方がま
さる。女の子ども。

シヨウニ (小児)

子ども、または、幼児。

シヨシャウ (初生)

ハジメテ ウマルル (初めて生まるる) 人が間もなく生ま
れる時。仏法語。

シャウシヨ、またはシャウジヨ (生所)

ウマルル トコロ (生まるる所) 人が生まれる場所。文書

語。

シユゴ (守護)

マモリ、ル (守り、る) 統治者、あるいは、長官。また、

守ること、あるいは、擁護すること。

(例) シユゴノ アンジヨ (守護のアンジヨ) 守護して

くれるアンジヨ [守護天使]

シユヂャウ (拄杖)

坊主 (ボンゾ) が、弟子をこらしめたり、叩いたりするた
めに机の上に置いておく杖。

シユツタイ (出胎)

ハラヲ イヅル (胎を出づる) すなわち、ウマルル (生ま
るる) 生まれること。

シユッセ (出世)

ヨニ イヅル (世に出づる) この世に出て来ること、すな
わち、この世に生まれること。また、坊主の間にある或る
階級に上がること。

シユツシャウ (出生)

ウマレ イヅル (生まれ出づる) 誕生。

ヤクビャウ (疫病)

ペストのようなある伝染病。

ヤクモサウ (益母草)

薬用になる草。

ヤドリ、ル、ツタ (宿り、る、った)

宿をとって居る、または、何か物の中に閉じこもって居る。

(例) タイナイニ ヤドル (胎内に宿る) すなわち、腹

の中に居る。

珍しく雪になった。春一番が吹いたというのに、冬が巻き返しに出ているのだろうか。窓外に、霏霏と降りしきる雪片を見ながら、五月号の奥付を書く。月刊雑誌とは、奇妙なものだ。

然し、考えてみれば、私どもは「幼児教育」という名の営みにおいて、同じようなことをくり返しているのではないか。いま、「四才」の彼らと対しながら、私どものまなざしは、時として何年か先だけを注視する。彼らのはずむ呼吸や汗のにおいにもまして、「大きく変わった」きにも困らないこと」が気になる。空想の未来が、子どもたちの「いま」を凌駕するのだ。

しかも、私どもは、何故かそのことのおかしさと空しさに気付きにくい。雪降りの日に、五月の保育を語ることの不自然さは自覚されても、四才の子どもを大人の時点に直結させることの不確かさ

は、意識されにくいというのだろうか。彼らが大人になったとき、その世界が、私どもの予想の範囲内にあるという保証は何一つ与えられていないというのに。

そこで、五月の風を想定することを止めて、とりあえずは、窓外の雪を見つめてみる。高層ビルの外に降る雪は、大まかに、二通りの動き方をしている。私に近い手前の雪は、頼りなげに浮遊し、横に流れて、地上に真すぐに降りていかなように見える。然し、その向こう側で、遠くに降る雪は、ちらつきながらもほぼ真すぐに下降し、地上を白く埋めていく。ある程度の広さで把えるとき、雪は截然と二つの動きを示して、遠近法的な把握を、さながらにモデル化して見せてくれる。つまり、「いま」を熟視するということだが、遠くを見ることでもあるということだ。私どもは、子どもたちの「いま」を熟視しているだろうか。(H)

幼児の教育 第八十二巻 第五号

五月号 ㊦

定価三〇〇円

昭和五十八年 四月二十五日 印刷

昭和五十八年 五月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一九六四〇番

●本誌御購読についての御注文は発売所
所フレイベル館にお願いいたします

*万一製品不良品がございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中

実践記録を通し保育の見直しを

自由遊び再発見

野辺繁子・矢作邦子 共著

自主性のある子ども、意欲のある子どもを育てる!!

子どもの自由感と自己充実感を保障し、子ども自らが考え、行動することを、時間をかけて育てるという“自由な”保育が最近見直されています。本書は、その具体的な実践のあり方を、やさしく、わかりやすく説いたものです。文字や数を“教える”ことよりも、もっと大切なものは何か、幼児教育の原点について本書と共に考えてみませんか。

B6判・288頁・定価1,200円

子どもの遊び(全6巻)

●全国学校図書館協議会選定図書●

0歳から三歳 三歳から六歳

(3巻セット) 土屋多喜栄 丸尾ひさ

(3巻セット) 本吉圓子 前 典子

本吉圓子 田中文字子 著

笠間典美 田中文字子 矢作邦子 著

この本に収録した遊びは、0歳から6歳までの子どもの成長過程において、だれでもが大好きで、必ずといってよいほど通過する遊びです。また、これだけはぜひ経験させたい遊びを現場の体験を生かした保育者の目でまとめたものです。

遊びの中で何が育っているか、保育者はどんなかかわり方をすればよいか、どうしたらその遊びがさらに楽しくなるかなどについて考え直すヒントがたくさんもり込まれています。

B5判・セットケース入り・セット定価 各3,300円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7781(代)にお問い合わせください。

フレーベル館

新 刊

幼稚園における心身に 障害をもつ幼児の指導事例集

文 部 省 著

障害をもつ幼児を受け入れる心構えと、指導の事例を豊富に提供!!

本書は、障害をもつ幼児に対する指導のあり方や、受け入れに当たっての考え方など、基本的なポイントを示したものです。

各地の幼稚園の指導事例が豊富に紹介されていますので、実際の保育指導に大へん役立ちます。

A5判・184頁・定価 90円

好評発売中

幼稚園教育早わかり 一問一答

文 部 省 幼 稚 園 教 育 課 内 幼 稚 園 教 育 研 究 会 編 著
推 せん 文 部 省 初 等 中 等 教 育 局 長 三 角 哲 生 氏

幼稚園教育の内容から法令にいたるまでの総合的なガイドブック!!

本書は、豊かな幼稚園教育のために、その内容から法令、通達にいたるまでの諸問題を、文部省幼稚園教育課のメンバーが総力を挙げて懇切丁寧に説きあかした画期的なガイドブックです。幼稚園教育の向上をめざす人びとにとって、本書はまさに必携の1冊といえましょう。

A5判・276頁・定価 1,200円
